
裏切られた勇者のその後……

市村鉄之助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏切られた勇者のその後……

【Nコード】

N0622X

【作者名】

市村鉄之助

【あらすじ】

地球から召喚され勇者となってしまった高校生の主人公は魔王と戦っている最中に、仲間に裏切られた。

それも聖女と呼ばれる王女によって……。

生き残った勇者と魔王が進む道は？ 裏切った聖女は何をしたいのか？ 他の仲間は？

勇者でなくなりただの高校生へ戻った主人公はこの世界を知らなかったことに気付く。国々の争いで傷つく民、迫害される異種族。それを知った元勇者は何を思い、どうするのか？

これは味方に裏切られた勇者のその後の物語です。

0

「裏切られた勇者」（前書き）

相変わらずスローペースだというのに、新しく投稿させていただきました。
ました。

ちよこちよここと書いている内に物語にすることができたので投稿させていただけます。

こちらも楽しんでいただければ幸いです。

異質な空間に閉じ込められた。

そのことに気が付いたのは「魔王」と戦い続けて、二日目の夜だった。

「……なんだ、これは？ 君の魔術か何かか？」

その突然の出来事に、漆黒のローブに身を包み、道化の仮面の下から疑問の声を上げる。

男か女か分からない中性的な声だった。

「違う、そもそも俺には魔力があっても魔術の才能はない。それは戦っているお前が一番知ってるだろう！ これは、お前の仕業じゃないのか？」

一方、魔王と対峙し剣を握る少年も、突然過ぎる展開に理解がでないかと首をかしげている。

二人は「魔王」と「勇者」であった。

そして、最後の戦いをしていた……はずだったのだが。

「一体、どうなってんだよ!？」

空間が縮む。

少しずつだが確実に。

「このままでは、まずいな。多分、時間が経てば私たちはクチャつとくいな」

「魔王がクチャつとか言うなよ……」

魔王はそう呟くと、腕に宿らせた業火を周囲に放った。

「熱っっイー！ テメー、ふざけんなよ！ 閉じられた空間で何してんだよ、このボケが！ 早く、炎を消せ、このままだと丸焼きになるぞ！ ていうか、魔王と勇者の丸焼きってなんだよ、誰も買わねーよ！」

「パニックを起こして訳のわからないことを言ってるところをすまないけれど、この炎は消えないよ」

「はい？」

今、なんて言った？

「えっと、そのだな、つまりその、空間を破壊するためになんか本気で放った業火なので、ちょっと消すのは無理かな……なんて」

「丸焼き決定イイイイ！」

私と戦っている時の勇姿はどこへいった？ と、呆れる魔王だが勇者は錯乱状態だ。

「ふむ、どうしようか。おい、勇者。君の仲間は助けてくれないのか？」

「そうだ！ おい、助けてくれ！ 姫さん！ お師匠！ レイン！ キーア！ ストラトス！」

しかし、返事はない。

どうしてだ、と絶望する勇者に魔王は一言。

「見捨てられたな……」

「うっそん？」

「うん、嘘だ。いや、すまん、謝るからそんな今にも死にそうな顔しないでくれるかな……なんだかもの凄い罪悪感が」

「罪悪感を覚えるくらいなら、冗談も場の空気読んで言えよな！」

「す、すまん」

とはいえ、と魔王は仮面の下で唸る。

「このままでは死ぬな。クチャッとプチッと、もしかしたらミリミリグチャツかもしれない……」

「やめてくれない、その効果音。特に、ミリミリグチャツとか一番最悪じゃん！」

このまま死にたくねー！ と、馬鹿みたいに魔力を込めて剣をぶん投げた。

するとどうだろう。

キンツ、と金属音を立てて空間の一部に剣が刺さったのだ。

「おおっ！ やるではないか、勇者！ では私も！」

「炎はやめろ！」

「……では私も、いくぞ」

「お前、今炎ぶっ放そうとしたよな？」

勇者の呟きは無視して、魔王は魔術を放つ。

それは雷を纏った竜巻であった。すべてのものをなぎ払いながら、雷撃を与えるとという広範囲魔術を凝縮させて勇者の投げた剣に向かって放つ。

もの凄い、轟音が空間内を響き渡り、思わず勇者は耳を塞ぐ。そして、静寂が戻ると同時に、ひび割れていくような音が聞こえてくる。

「うん、上手くいったようだな。おそらく、この魔術は対象を捉え、クチャっとする魔術だ。いつの間にか張られているところを見ると、隠密性も高く、素晴らしい魔術だ。が、しかし、中にいる者が術者よりも魔力が上であれば破ることはできるということだな」

満足気な声に聞こえるのは気のせいだろうか、と勇者は思う。と、同時に、ふと気付いた。

「お、おい、魔王！　じゃあ、この魔術使った奴って、俺ごとアンタを殺すつもりだったってことじゃないか？」

「……せつかく言わないでやってたのに、気付いてしまったか。まあ、そうなるな」

だが、戦略としては間違っていない、と魔王は言う。

「そもそも人間が最も危険視する魔王を殺せるのならば、例え勇者であっても一人の犠牲ですむのなら私でもきつとそうするだろう。人間側は追い込まれているからな」

「……」

魔王の言葉に、呆然として膝を着く勇者。

そんな勇者を見るに耐えなかつたのか、魔王は優しげな声で話しかける。

「気休めにしかならんが、幸いもう二、三発魔術を当てれば空間も破れる。私を殺すことができなかつたが、君も死ななかつた。とり

あえずは良しとしよう」

「……良しじゃねえよ。俺が仲間だと思っていた奴がこれをやったんだぜ？ 空間から出たとして、俺はどんな顔をすればいいんだよ？」

「何もなかったふりをしていれば良いのではないか？ それに、魔王討伐が失敗したとはいえ、家族と再会はできるだろう。そして、勇者などやめてしまえ」

そんなことを言ってくる魔王に、ポツリと勇者は呟いた。

この世界に家族なんていねーよ。

その意味を理解したのか、魔王はすまないと言う。

「いや、謝らなくてもいいけどさ。別にこの世界にはいないだけで、元の世界にはいるんだから」

「……なに？」

ふいに魔王の声のトーンが変わった。

「今、なんと言った？ 君の家族は元の世界にいる、と言ったね。では、元の世界とはどこだ？」

「なんだよ、知らなかったのか？ 俺はこつちの世界にいきなり召喚されて、今日からあなたは勇者ですって言われたんだよ。それで一年掛けて……現在に至る」

「……まさか、そんな……勇者召喚魔術はまだ存在しているのか？ では、ならば、君は私の……」

動揺を隠せない魔王は仮面をヒビが入ってしまうほど強く爪を立てる。

フラフラとおぼつかない足取りで、絶望していた勇者でさえ不安になってしまう。

「お、おい、どうしたんだよ？　俺が異世界人だっていうのがそんなに驚くことだったのか？」

「そ、そうだ！　君はどここの生まれだ、地球ではないか？　地球の、どこの国の」

魔王がそこまで言った時だった。

ガラスが砕けるような音が空間内に響き渡る。

空間が破れたのか、と思った勇者であつたが、それは違った。

「勇者！　障壁は張れるか？　張れるのなら魔力をすべて注ぎ込んで張るんだ！　それができないなら私の下へ来い！」

「ちょ、ちよつと待てよ、何をそんなに……」

焦っているんだ、と聞こうとするが、魔王は勇者の言葉を遮り怒鳴る。

「早く言うとおりにするんだ！　空間を早く破っておくべきだった。破られる対策もされている。いいか、今から空間に注ぎ込まれている魔力が攻撃魔術として降ってくるぞ。それも盛大なやつだ！　わかつたな、早く障壁を！」

しかし、魔王の叫びは遅かった。

勇者が、魔王が、障壁を張るよりも早く、強大な攻撃魔術が降り注いでくる。

雷が、炎が、槍と化した氷が、水の刃が、切り裂く風が、勇者と魔王を傷つける。

「ああああああああッ！！」

「ッ！」

勇者は叫び、魔王は叫びすら上げられなかった。

何故なら、魔王が勇者を抱きしめていたから。ゆえに、勇者に降りかかる攻撃魔術の一部を自身に浴びていたのだ。

やめろ、と勇者は叫びたかった。叫んだつもりだった。だが、口からでるのは痛みには耐えられないという叫びだけ。

そして、数十分にも及ぶ、攻撃魔術の雨に勇者と魔王は倒れた。

一方、勇者と魔王を閉じ込めた結界の外では、エルフの女性が人間の少女を殴りつけていた。

「貴様は、一体何をしたのか分かっているのか！」

エルフの女性が怒鳴りつけるが、少女はそれに可憐な笑みで答える。

「何を、といいましても……ただ、魔王を殺したただけですが？」

どうしてそんなに目の前の女性が怒っているのかが本当に分からないと、少女は痛む頬を押さえながらも、笑みを浮かべて首を傾げた。

エルフの女性 シェイナリウス・ウォーカーはゾツとした。

目の前の少女 アンナ・サンディアルは本当にどうして自分が殴られたのか、どうしてシェイナリウスが怒っているのかが分から

ないのだ。

「姫様！ どうして兄貴を！ 姫様は兄貴をいつも守っていたじゃないですか、ずっと優しく……俺にも姉貴の様に接してくれていたのに、どうしてだよ！」

剣を握る少年、ストラトス・アディールが怒鳴り、その怒りをぶつけようとして、ようやくアンナはなるほどと頷いたのだ。

「勇者様ごと殺してしまったことに皆さん怒っているのですね？でも、仕方がないんですよ。この魔術を魔王に仕掛けるには罠が必要でしたし、勇者様が死んでしまっても悲しむご家族はこちらの世界にはいらっしやらないでしょう？ ストラトス君じゃあ魔王を相手にできませんでしたし、シェイナさんはエルフの中でも高貴な方ですし、同じ理由でレインさんも駄目です。キーアちゃんも今後が楽しみな魔術師ですから私の国のために働いてほしいです。だからほら、やっぱり罠は勇者様でない！」

その場にいた、皆が呆然とした。

レインとキーアと呼ばれた少女は、その場に膝を付き、涙を流す。

「それに、勇者様は召喚でこちらに呼ばれ、元の世界に帰る方法を探していましたけど。帰る方法などありませんし、そもそも勇者様を召喚したのは私ですよ」

「え？」

その驚きの声は誰のものだったのか？

「まで、アンナよ。貴様が勇者召喚魔術を行ったのか？」

「はい」

「あの魔術は人攫いと変わらん魔術だと憤慨していたのは貴様ではなかったか？」

「ええ、酷い魔術ですよね」

「なら、どうして……」

「だって、仕方がないじゃないですか。今、サンディアル王国は他国と連合を組んでいます。これといって優秀な戦力はいません。将来有望な方はいますが、そうになると連合での立場が危うくなります。そこで私は考えました。強い武器が欲しいと、そしてその武器を使って魔王を殺し、英雄となって私がサンディアル王国の女王となることを」

目の前にいるのは誰だ？

「しかし、貴様には姉が居る！ 王位継承権は姉の方が上だぞ！」

「その辺りはなんとでもなりますよ。殺したって良いですし、魔王を殺した実績があれば父上も私に王位を譲ると思います。口約束ですが、一応、伝えてありますので」

一年間、一緒に旅をしてきたが、本気でそう思った。だが、思いあたる節はあった。

「それと、ストラトス君。私が勇者様に優しいだなんて、当たり前じゃないですか。道具を大事にしない人はいませんよ？」

「……本気で、言ってるんですか？」

「ええ、何か変ですか？」

それとなく、勇者に注意を促したこともあった。

時折、アンナから言葉には言えない、気のせいかもしれない、そんな気持ち悪さを感じることがあったから。何よりも、サンディアル王国が少しおかしいことを知っていたから。

だが、今となつては後の祭りだ。

エルフだから極力人間とは関わりたくないと思ひ、弟子である勇者にも最低限の注意しかしていなかった。

「まさか、貴様がここまで腹の黒い女だったとは！」

アンナは笑みを浮かべるだけ。

「それに……勇者様ももう少し、本当にもう少しだけ考えがまとまらなかつたら違つていたんですけど、残念です。便利な道具はここでお終ひです。異種族との交流を深める、魔王を殺したくない、そんな気持ちの悪いことを言うんですよ？」

シエイナリウスは絶句する。

確かに人間と異種族はお世辞にも仲が良いとは言えない。だが、サンディアル王国はエルフとは友好的な関係を築いてきた。だからこそ、勇者の師となるきっかけがあつたのだ。

だというのに、そのサンディアル王国の王女が、エルフに面と向かつて異種族の交流を気持ち悪いと、嫌悪を示したのだ。

つまりそれは……。

「貴様はずつと、私達姉妹をそんな風に思つていたのでな」

「ええ、どうしてお爺様はエルフなどと友好的な関係を築くことができたのでしょうか？ 私が王となつたら、いいえ、国に帰つたらすぐにもエルフとの友好関係はお終ひにしたいですね」

「貴様！」

誰も彼もが驚きを隠せない。

勇者を魔王ごと殺し、勇者を道具と言ひ、苦難を共にした仲間に嫌悪を抱く、それが聖女とまで呼ばれたアンナ・サンディアルの本

性だったか、と。

「さてと、いつまでもここに居ても仕方ありませんので、帰りましょう！ 懐かしの我が国へ！ 国へ戻れば私たちは英雄です！」

爛々と瞳を輝かせながら、魔王城でアンナ・サンディアルは大きく笑ったのだった。

「い、生きているか……勇者……」

勇者の仲間たちが去った後、すぐに空間が歪んだ。血だらけになった魔王が勇者を抱えて、空間から投げ出されたのだ。

勇者からは返事がない。

生きているのか、気を失っているのかわからないが、それを確かめたくても過度の魔力不足と出血多量に視界が歪んでいる。

「しかし、あの有名な聖女の本性があれほどだったとは……勇者から返事がないということは気を失っているか、死んでいるか、か……話が聞こえなくて良かったと言っべきか？」

魔王には、彼女たちの話は聞こえていた。

まさか聖女とまで呼ばれる者が、仲間一人を道具扱いとは、驚きを通り越して感心してしまう。

「だが、仲間はずっといたな……それだけは救いだ」

そう言いながら勇者を担ぎ、何とか助けを求めようと歩きだす魔王の顔から仮面が落ちる。

魔術によって頑丈にしていたが、あれだけの魔術をくらえばたかが仮面など簡単に砕けるだろう。

そして、その砕けた仮面の下から現れたのは美しい、女性の顔だった。

きっと勇者が見ていたら、驚いたに違いない、異世界へ来てから地球に居たときよりも比べ物にならないほど整った容姿の者と出会ってきたが、彼女はその中でも一、二を争うほどの美人だった。

「魔王様！」

黒い甲冑に身を包んだ騎士と、メイドが一人ずつ駆け込んでくる。

「ご無事でしたか、魔王様！ ツ…………どうして勇者を？」

黒騎士が驚きを隠せないながらも、魔王から勇者を受け取る。

「彼はどうやら聖女に道具として操られていたらしい。彼は生きてるか？」

「はい、ギリギリですが、かろうじて」

「ならば私は彼を助きたい」

「ハッ、魔王様の御心のままに」

黒騎士は慎重に勇者を担ぎ上げると、医療魔術のできる者を求め急ぐ。

その時、三人は気がつかなかった。勇者が涙を流していることに。

「魔王様のお体は？」

残されたメイドが尋ねると、大丈夫だと魔王は言う。

「勇者を庇ったはずだったが、途中で逆に庇われてしまった。聖女の話では、勇者は私を殺したくなかったそうだが、異種族との交流を深めたかったそうだ。人間の理想とする勇者像ではないな、ゆえに聖女に切り捨てられた」

「お可哀想に……しかし、魔王様を庇うとは、本当に人間の勇者なものでしたか？」

「ああ、異世界からやってきた異邦人だ。それゆえに、考え方も違うのだろな。とにかく、命の恩人だ」

メイドの肩を借りて、魔王も黒騎士の後を追う。

魔王も重症であるが、死にはしないと分かる。まだ僅かに残っている魔力が、少しずつ魔王の体を癒している。だが、勇者は危険だ。魔王を庇ったせいもあるが、魔力も底を尽きている。

生きていて欲しいと思う、死なないで欲しいと思う。

「我らの仲間はず？」

「はい、聖女が魔王を殺したということで、人間の連合軍は引きました。後日、またやってくるでしょうが、その時まで立て直せませぬ。魔王様のご健在なのですから」

「そうだな。何よりも、向こうは唯一私と戦えた勇者を切り捨てたのだ。二度目はないさ。我が軍も撤退させ、守りを固め、負傷者の治療を行え」

「はい」

メイドは使い魔を放つ。これで、最前線の指揮を執るものに魔王の生存と命令が伝わるだろう。

「聖女よ、後悔させてやる。私は、お前のような者が最も嫌いな
だから……」

大陸暦三〇〇五年、サンディアル王国率いる連合が、勇者とその
仲間が魔王を討ち取ったことで人間の勝利となる。

聖女アンナ・サンディアルをはじめとした英雄たちは、連合諸国
に称えられた。

魔王と相打ちになった勇者は、生前の遺言である、歴史に名を残
したくないという願いが叶えられ、墓すら立てられなかった。

ゆえに勇者の名前は誰も知らない。

歴史では、そういうことになっている。

0

「裏切られた勇者」（後書き）

異世界に召喚される主人公が裏切られたら？ と、思い書きました。
裏切られた勇者がどうなるのか、そして仲間たちは？ 聖女は？
魔王は？

ご意見、ご感想、ご評価頂けると嬉しいです。どうぞよろしくお願
いします。

1 「……二週間後」(前書き)

初日からPV4800、ユニーク1300を超えてびっくりです！
また日間ランキングでも68位と嬉しい限りです！
皆様本当に、どうもありがとうございます！

一人のコート姿の少年ストラトス・アディールが背中に剣を背負い、荷物の詰まった鞆を持つ。

剣士スタイルではある少年だが、その体に鎧のような防具なるものは身に着けていない。命の恩人であり、憧れる兄貴と慕う「あの人のスタイルを出会ってから真似しているから。」

「行くのか？」

ふいに声が掛けられた。後ろを向くと、美しい容姿に尖った耳、白い肌に銀髪を持つエルフの姉妹が立っていた。

「あの人の師匠とその妹であり、共に旅をした仲間である。」

「はい、俺は兄貴は絶対に生きてると思うんです。笑えるほど強い人だったから」

「……そうだな」

エルフ シェイナリウス・ウォーカー、「あの人の師匠でありエルフの一族でも強く、人間で例えるなら王族である出身の身である。もちろん、その妹であるレイン・ウォーカーも。」

「シェイナリウス様、レインさんもこの国を出て行くんですね」

二人も旅支度をしていることに気付き、尋ねる。

ストラトスよりも少ない荷物であるが、それが彼女たちのすべての荷物だと知っているから。

「姉上は「あの人」を気に入って、私は世界を見たくて里から出ました。ですが、アンナ・サンディアルがエルフとの友好関係を必要かと疑問視する声を上げたせいでこの国に居づらくなってしまいました。なので、里へ帰ろうと思います」

「まだ国へ戻ってきて二週間しか経っていないのに……最悪っすね」

暗い顔をするストラトスに、シェイナリウスとレインは笑ってみせる。

「ストラトスが気にすることではない、もともとエルフも異種族。人間とは相容れなかったということだ」

「俺はそんなことを思っていないっすよ！ もちろん兄貴だって」「分かってている。だが、人間はお前や馬鹿弟子のような者ばかりではない。それはお前もよく知っているだろう？」

ストラトスは頷き、唇をかみ締める。

たった一年間、だけどずっと一緒にいた仲間が裏切ったから。

親に捨てられて死に掛けていた自分を、得にもならないのに本当に善意で助けてくれて、兄貴になってくれた「あの人」を裏切った女を思い出して唇をかみ締める。

「間違っても挨拶などして出て行こうとするでないぞ？ あの女はお前はもちろんキアのこと手放す気はないぞ。将来が有望だからな」

それは嬉しいのやら、腹が立つやら複雑だ。

「そういえば、キアはどうしてます？」

「あの子も国を出るそうだ。この国には居たくない、と。それなら、一緒に行動したほうがいいだろう。追っ手が来るかもしれない、キアは発展途上ではあるが優秀な魔術師だが、前衛がいなければ役に立たん。あの子も今頃荷造りをしているところだったから丁度いいだろう」

「そうします。兄貴の分まで俺が守りますよ！」

無理をして自身に発破を掛けているストラトスだったが、エルフの姉妹は何も言わず頷いた。

「ではな」

「元気でね」

それが別れだった。

「じゃあ俺も行くか！ とりあえず、キアの所に行って……待っていてくださいね、兄貴！」

そして、ストラトスも旅立つことになった。

アンナ・サンディアルは自室で大笑いしたくなるのを必死に堪えていた。

魔王を殺して、国へ帰ってきて二週間。その間に、自分の思い通りにことが運んでいた。

最も彼女を喜ばせたのが、王位継承権を見直すという話が浮上ってきていることだった。

アンナの姉は優秀だった。次期女王として最高の王になるだろうと家臣からも民からも言われ続けていた。

だが、それは違つとアンナは思っている。

姉は確かに優秀だ。それは認めよう。だが、王になるべき器ではない。

せいぜい、連合諸国の王族との婚姻を結ぶ駒程度だ。

しかし、自分は違つ。

それをこの一年で証明してみせた。

医療魔術が得意なこともあり、分け隔てなく困っている人々を助け聖女と呼ばれるようになった。そして、魔王を殺し英雄にまでなったのだ。

国や城、兵に守られて勉強をしているだけの姉とは違つ。自分で掴んだのだ。

姉の側近たちは王位継承権の見直しに必死で反対しているが、きつと願いは叶うだろう。

そう思うとつい大声で笑いたくなくなってしまつ。

そして次に、異種族との友好関係を崩すことができたことが喜ばしい。

アンナは異種族が嫌いであつた。嫌悪していたと言っても良い。生まれながらに人間よりも優れ、人間よりも長く生きる。その逆もいるが、異種族は基本的に人間よりも優れている存在だ、

だというのに彼等は支配を望まない。友好的なことばかりを提案する。

綺麗事過ぎて、反吐が出てしまいそうになる。

力を持つのに、人間と友好をなどと言葉にする異種族は必ず人間を見下しているのだと思つている。

この一年は辛かつた。

「道具」のために、いくら国が友好関係を築いているといわれて

もエルフと寝食を共にしたのだ。

「本当に辛かったですね」

しかし、その一年を我慢したかいはあったのだ。

彼女がふと口にした、異種族との友好関係は必要かという問いに、最初はサンディアル国側も驚きを隠せなかった。

連合で唯一、誇り高く、気難しいと言われるエルフと友好関係を築いている国なのだから。

その国の第二王女からそんな問いができれば、驚くのは当然だった。だが、彼女の言葉にサンディアル国側も考えを変えつつある。

アンナは言ったのだ。「共に旅をしてきましたが、エルフの力は強い。そして彼等は聡明です。いつかきつと彼等はその力を人間に向けるかもしれません、しかしその力に抗うことはきつとできないでしょう、もう「勇者様」はいないのでから」と。

同時に、他の連合諸国はそれに賛成する。何故なら、他の国々は異種族との友好関係を持っていないから。

それを手放してくれるのであれば、他国としては大助かりなのだ。所詮、連合といえども、我が国が一番の優位でありたいと思う国々なのだった。

それを上手く利用したのだ。

「本当に、何もかもが思い通りね」

彼女は贅を尽くすわけではない、民を苦しめることはしない。今日も、会議の合間を縫って、街へ出て民との交流を深めてきた。

子供と遊び、歌を歌う。

戦争で親を失った子供たちのために孤児院と学校を作る計画も提案している。

そしてそれは問題なく受け入れられている。

姉は違う。

外には出ずに、国をより良くどう導くかを勉強している。だが、もうそれだけでは遅いのだとアンナは思う。

「私は必ず王になるわ」

アンナ・サンディアルは深い笑みを浮かべた。

だが、その笑みも長くは続かなかった。

「失礼します」

白銀の胸当てをした、金髪青年だった。

彼は王が聖女と呼ばれ英雄となった彼女に与えた騎士の一人であり、アンナの近衛騎士団一〇〇人を纏める団長でもある。

「あら、どうかしましたの？」

「はい、いつの間にかは分かりませんが、ウォーカー姉妹が宿から消えました」

「別に気にしないでください。どうせ近い内に追い出すつもりでしたので。それに、彼女たちが本気になったら人間では探すことは不可能だと思います」

「ハッ。それと……ストラトス・アディールとキア・スリーズの二人が街から出て行ったという急ぎの知らせが入ってきました」

この報告には流石のアンナも笑みを消した。

「なんですって？」

「兵士たちが思いとどまるようにと、せめて姫様にご挨拶をと説得しましたが、最終的には強行突破される形となってしまいました。

流石に、英雄であるお二方に兵士たちもどうしてよいのか対応に困

ったのでしよう」

「なら、仕方がないですね。追っ手は出せますか？」

「はい、お時間さえ頂ければ」

「ではお願いします。少しでも早く、二人を保護してください。他国に目を付けられたら大変です」

アンナの命令に短く返事をする、青年は礼をしてから部屋を出て行く。

一人になったアンナは心底不思議そうにする。

「一体、どうしてこの国から出ようだなんて考えたのかしら？」

二人にはこの国の力になって欲しいと伝えていた。

まだ剣士として未熟なストラトスは騎士団へ入隊させ、立派な騎士になって彼を捨てた親を見返してもらいたかった。キーマもそうだが。現時点で十分に優秀であるが、その豊かな才能をもっと発揮できるように彼女のために優秀な師も用意していた。

貴族ではないために後に苦労しそうなのは分かっていたので、後見人に自分になってもいいとまで考えていたのに……。

「どうして……？」

まるで能面の様に無表情に彼女は呟く。

「どうして、二人は私に断りもなく勝手にどこかへ行こうとしたのかしら？」

そう淡々と呟いたのだった。

メバリア大陸の北部に魔王が暮らす魔王城がある。

いや、もつと正確に言えば、魔王城を中心に異種族が暮らす他民族国家があるのだ。

異種族は人間に迫害される者である。有名なところでは、エルフ、獣人、精霊などだ。もちろん、他にも多くの種族が存在しているが、その種族たちを纏めているのが「魔王」なのである。

その国を人間は「帝国」と呼び、恐れ畏怖する。中には北部を「幻想世界」と呼び焦がれる者もいるという。

その一方で、帝国に属さない種族や部族もいる。そんな彼等は隠れ里などに暮らしていたり、中には友好的な人間の国と関係を結んでいる種族、部族もある。

逆に、人間でありながら、人間に酷い扱いを受けて北部に逃げてくる者もいる。

しかし、異種族たちは彼等を優しく受け入れる。人間であろうとゆえに、帝国に人間も少なくないのだ。

そんな大陸北部にある魔王城のある帝都イスルギの一つの家に、「彼」は寝かされていた。

「まだ、彼は目を覚まさないのかな？」

「そう問うのは魔王だ。」

勇者を迎え撃った姿とは違う、町娘のようなシンプルなスカートにブラウスを着ている。

それでいて、闇のように漆黒の髪は美しく、彼女の白い肌に映えている。

「残念ながら」

そう首を振るうのは亜麻色の髪の毛のメイドである。
勇者と魔王が空間から出てきた際に、駆けつけたメイドだ。
彼女は魔王とは親戚関係であり、魔王よりも若干大人びた印象を
与える女性だった。

「魔力、体力共に回復はしていますが、ここまで回復したのが奇跡
ですので、目を覚ますかどうか正直わかりません」
「そうか……」

それだけ言うと、彼女は彼の枕元にある椅子に座り、彼の髪を撫
でる。

「君の名前が知りたい、君の生まれ育った国のことを聞きたい、そ
して私も君に名前を名乗りたい。色々な話をしたいんだ。だから、
目覚めてくれ」

優しく髪を撫でながら彼女は続ける。

「もしかしたら裏切られたことでショックを受けて目を覚まさない
のかな？ だったら安心して良い、この国では敵はいないよ。この
国では皆が家族で仲間で味方だから」

しかし、彼から反応は返ってこない。
そもそも聞こえていないことを前提で話しかけているのだから、
期待はしていなかった。

だが、もしかしたら、と思わない訳でもなかったのも事実だ。

「ところで……国の被害は？」

「はい、だいぶ酷いですね。とはいえ、もともと国が広いわけでは

ありませんので、侵略などの被害はありません」

「だろうね。北部は今が良いが冬が長く、冬になれば人間には暮らし辛い場所だ。だからこそ、私達の国があるのだけれどね」

「前線は北部ではなく、西部に近い場所で戦っていましたので、北部に被害がないのは幸いでした。帝国兵もそれ程の被害は受けていません。とはいえ、勇者一行に倒された者は多いですね。ですが、死者は少ないです。ほとんどの者が気絶か動けなくなる程度に痛めつけられて終わっています。勇者が魔王を倒したくない、異種族との交流を深めたかったのはこのことから見ても本当でしょう。また仲間にエルフがいたことも重なって、死者は少なかつたようですね。どちらかといえば、前線の方で死者が出ています」

「なるほど……」

「將軍からの報告ですが、あくまでも連合は勇者一行を魔王様の下へ送ることが一番の目的だったようですので、一行が帝国軍を突破してからは小競り合いの時間稼ぎが主立っていたそうです」

ふむ、と魔王は考える。

確かに悪くない手ではあると思う。

そもそも人間の兵士と帝国軍の兵士では、基本からして差がある。もちろん、そんな差を埋めるために、人間は魔術を使い、強い武器を作り、貪欲に強さを求めている。

ゆえに一筋縄ではいかず、帝国は大きくなるらない。

「もつとも、帝国を大きくするつもりはないんだけどね。どうして人間は領土拡大をしたがるんだろうか？ もちろん、領土拡大の利点は分かる、だが、私たちは……迫害などされずにのんびりと平和に過ごしていただけなんだけどね」

寂しそうに魔王は呟く。

どうして人間にそれが伝わらないのか、と。

「とりあえず、人間の国では私は死んだことになっているし、今後が少し心配だね」

「はい、連合が調子に乗って攻めてくる可能性も大きいです」

「とはいえ、勇者クラスの實力者はいないだろうね。ただ、あの聖女の魔術はまずいね、二度は食らうつもりはないけれど、人間は魔術開発にも力を入れているというのは本当のようだね……正直、勇者が私を庇ってくれなかつたら死んでいただろう」

「……そこまでですか」

絶句するメイドに魔王は笑ってみせる。

「考えてごらん、空間に閉じ込めて圧縮して殺す魔術だけど、破ろうとすれば上級攻撃魔術の各種が雨のように一時間近く振ってくるんだよ？ 空間に捕らわれているから逃げ場は無し。魔王と言われなくても命は一つだし、あれは死ぬね」

「対策は？」

「空間圧縮なら魔力が強ければなんとかなる。だけど、その対策の上級攻撃魔術の雨が問題だね。対策としては、一秒でも早く空間を破ること。後は、私たちのように障壁だけで全開で耐えるか……くらいかな」

「魔王と勇者が死に掛けた攻撃を他の者が耐えられますか？」

至極当たり前な質問に、意外と魔王は簡単に頷いた。

「一応、二日も飲まず食わず、眠らずに戦っていた時に食らったからね。いきなりやらねければ気づくことはできるし、魔力さえ温存されていれば破ることは難しくない。だが、そこまで要領悪く人間も仕掛けてこないだろうね、一番の問題はそこだよ」

「なるほど」

「それに、魔力が少なかつたり、体を使って戦うタイプの種族とも相性は悪い。力技での対抗策はないからね。あと、仮説だけど、外からも破ることはできると思う。あくまでも仮説だよ、私はわざわざ仮説を証明するためにあの魔術を食らうのは嫌だよ」

それは確かに、とメイドも思う。

とはいえ、人間が一番恐ろしいのは、そんな魔術を開発することではない。無論、その開発する執念も恐ろしいが、魔術を成功させるために同じ人間を平気で囮に使ってしまうことが恐ろしくて仕方がない。

帝国では禁忌だ。

迫害され、追われ、そして集まった異種族たちは仲間を家族のように大事にする。

だからこそ、仲間を囮に使うという発想ができないし、仮に発想ができて感情がそれを許さない。

それゆえに、異世界から誘拐同然に召喚され、道具として勇者にされ、最後には囮として捨てられた勇者に同情の声は大きい。

きつと魔王は勇者を仲間にしたいだろうと、メイドは思う。

彼女は優しい魔王だから。でも一番の理由はきつと……。

「う、ん……」

メイドが考えていると、彼が唸り声を上げた。

「お、おい、うなされているぞ」

「無理もないでしょう、仲間に裏切られたのですから。肉体的はもちろんです、精神的にもダメージは大きいと思います。これで幸せそうに寝ていられるのならある意味凄いですよ」

とはいえ、そんなこともなく勇者はうなされている。

苦しそうに、悲しそうに、辛そうに、掛けられた布団を強く握り締めて、小さく弱く、呻き声を上げる。

「大丈夫だ」

そつと魔王が勇者の手を握り締めた。

「大丈夫、君を裏切る者はここにいない。だから心配しなくていい。君を利用した者など忘れてしまつといいよ。例え、世界中が敵になつても私は君の味方であり続けるから」

魔王は優しく続ける。

「それに君を裏切つたのは一人いたけれど、残りの仲間が君を裏切つてはいないよ。私には非道な行いをした裏切り者に怒りを覚えているように見えた」

だから、と彼女は言う。

「目覚めて欲しい、負けないで欲しい、ここで負けてしまつたら君は悲しいまま死んでしまう。さっきも言ったんだが、私は君と会話がしたい、君の名前を聞きたい、君に私の名前を名乗りたい、お願いだ……目覚めてくれ」

その時、立ち会つたメイドは奇跡を見たと感じた。

魔王の思いが伝わつたのか、それともただタイミングが良かっただけか、ゆつくりと、ゆつくりとだが確実に勇者の目が開いていく。

「ま、魔王様！」

「うん、君は負けなかった。名前を覚えてくれないか？ 私の名前

はリオーネ・シュメールだ。君の名前は？」

大陸暦三〇〇五年の春、裏切られた「元勇者」と優しい「魔王」が出会った。

後に、歴史学者は語る。

この二人が出会わなければ、世界が滅んでいた可能性が高かったと。

後に、ある神学者は語る。

多くの問題を抱え、特に人間が異種族を迫害し、欲に塗れた「恥の時代」にこの二人が出会ったのは神による奇跡だと。

後に、古き時代から生きる龍は語る。

この出会いがあったからこそ、生涯で最初で最後の最高の主に出会えたのだと。

1 「……二週間後」(後書き)

勇者の仲間、聖女、魔王のその後を書かせていただきました。

もつしばらく後日談が続きます！

ご意見、ご感想、ご評価を気軽にいただけると嬉しいです。どうぞよろしくお願いします！

2

「裏切られた勇者目覚める」(前書き)

まさかの日刊ランキング4位です！信じられません。本当に、皆様どうもありがとうございます！

「私は絶対にストラトスは我慢できずに姫様を殺すと思ってたんだけどな」

「残念そうに言うな！ 俺だってできるなら殺してやりたかったさ…… だけど、兄貴はそういうのは喜ばないと思う」

「うん、どちらかと言えば、よくもやってくれたなこのやるーって自分で復讐するタイプだしね」

ローブを着た灰色の髪の少女に、赤髪の少年ストラトス・アディールは引きつった笑みを浮かべる。

「俺はそういう意味で言ったんじゃないんだけど、でも間違ってもいないか……」

「うん？」

不思議そうに首を傾げる灰色の髪の少女はキーア・スリーズ。

彼女もまたストラトス同様に、「勇者」の仲間である。

キーアは勇者が死んでしまい、そのショックで呆然としていたのだ。そして、思いついたように身支度を始めた。

こんな国に居たくない。

それが彼女が最初に思ったことだった。

キーアもストラトスもサンディアル王国の民である。だが、その生まれ育ちは不遇であった。

ストラトスは親に捨てられ、飢えて死ぬか、人を殺して生き延びるか瀬戸際で勇者と出会い救われた。

キーアは平凡な村の一般家庭で生まれながら、宮廷魔術師を超える程の魔力を持って生まれ、その魔力を扱う才能に恵まれた。しかし、大き過ぎる魔力は感情で暴走し、それゆえに家族から村から恐れられ、孤独だった。

そんな彼女を救ったのも勇者だった。勇者が頼み込み、土下座までしてエルフであるシェイナリウスに初歩的な手ほどきを受けた。そして、魔力を制御し、暴走することはなくなった。それでも、もう村に居場所がなかったキーアが危険だと言われても駄々をこねて着いて来たのだ。

始めは渋りながらも、いざという時は体を張って助けてくれた。それはストラトスの時も同じだった。

なんだかんだと言いながら、勇者は自分たちを守ってくれていた。

「強くならなくっちゃね」

「ああ、そして兄貴を探し出すんだ！」

だからこそ、お荷物であった自分たちが嫌だった。

実践という経験の中で、実力を少しずつ付けていったが、「魔王」を相手にするには……いや、帝国との戦争に参加するには二人は弱過ぎた。

慕っていた勇者が裏切りにあつた時、自分たちは何もできなかった。それが本当に悔しくて悔しくて仕方がなかった。

「ねえ、本当に生きてるよね？」

「あつたりまえだろう！ あの兄貴だぜ？ あの気難しいエルフの長と仲良く酒飲んで騒ぐくらいの型破りの人だ。今頃、元気に……もしかしたら、魔王と一緒に酒飲んでるかもしれないな」

「うわー。ありそうかも……あの人は魔王と戦っても殺し合いはしたくないって言ってたし、意外と想像できるのが怖い」

でもさ、とストラトスは呟く。

「異種族の友好関係？ 俺は学がないからよくわからないけど、シ
エイナリウス様たちエルフや帝国に暮らす獣人や精霊と仲良くしよ
うってことだろう？」

「うん、まあ、簡単に言えばそうだよ」

「ならその何が駄目なんだろうな？ 一年間、一緒に兄貴と旅し
たけど、人間だって腐ってる奴は腐ってる。あの女がそうだったよ
うにさ。でも、それに種族って関係あるかな？ 無いよな？」

「ないと思う」

前に、兄貴が言っていたんだ、とストラトスは思い出す。

「生まれが違うから、人間じゃないから、それは些細なことだって
兄貴は言っていたんだ」

「うん」

足を止めて、空を見上げていないと、涙が零れそうになった。

キーアも一緒に空を見上げる。

「俺は不安なんだ……異種族との友好とかを考えてた兄貴だけど、
同じ種族の一番仲間だった人間に裏切られたんだ。どこかで悲しん
でいるかもしれない、俺たちを憎んでいるかもしれない、もしも再
会した時に裏切り者だなんて言われたら」

「そんなことを言う人じゃないよ」

キーアが言葉を遮る。

「それに思われてしまっても、私たちがあの人に伝わるように必死

で言葉にすれば絶対にわかってくれるよ。あの人は優しいから」

「そうかな……」

「そうだよ」

ストラトスは鼻を嚙って、コートの袖で目元をゴシゴシと拭くと前を向く。

「ありがとう、キア。俺は兄貴を必ず見つけ出すよ」

「うん。そうしよう。私も一緒に行くから」

二人は歩き出す。

「ストラトス」

「なんだよ？」

「行き先は決めてるの？」

「ああ、もちろん 帝国だ」

そして、勇者を慕う少年と少女は、大陸北部にある帝国を目指したのであった。

一方、シエイナリウス・ウォーカーとレイン・ウォーカーのエルフ姉妹は出身の里へと戻ってきていた。
そして、戻ってきたその足で、すぐに里の長にことの顛末を告げる。

「そうか……まさか聖女と呼ばれたあの姫君がその様な考えの持ち主だったと。私も観察眼が未熟ということか」

里の長であり、ウォーカー姉妹の父親である、ハイアルウス・ウォーカー。外見はシェイナたちによく似ているが、人間でいえば三十代半ばぐらいに見えるだろうか。程よく鍛えられた体に、エルフ特有の民族衣装を纏う姿は神話に出てくる戦神のようでもある。その外見や雰囲気通り、魔術を得意とするエルフでありながら、武に精通し、その実力はエルフたちを纏めるのに問題がないほどである。

そんなハイアルウスだが、誇り高く、人間と馴れ合うことをしないエルフとは少し違った変り種である。

その最もたるものが、サンディアル王国と築いた友好関係であった。

無駄な争いを避けるために、これから生きる皆のために友好を結んだのだ。そして、その友好は上手くいっていると思っていた……先日までは。

「しかし、信じられないな……あのエロ小僧が死んだとは」

「私も死んだとは信じていませんが、アンナ・サンディアルの魔術は未知なるものであり、魔術を苦手とする勇者では……」

「お前ほどの使い手がそこまで言う魔術か……そうになると、私たちも身の振り方を考えないといけないな」

父の言葉に、姉妹は頷く。

確かにこのまま様子見というのは望ましくない。

すでにサンディアル王国ではエルフとの友好関係を切るべきだと言う声が多い。その声が小さくなることはないだろう、アンナ・サンディアルがいる限り。

そして、知る人は少ないものの、この隠れ里を知っている者はサ

ンディアル王国にいるのだ。いつ、軍がやってくるかわかったものではない。

「実はな、お前たちが帰ってくるよりも少し前に、古い友人から誘いを受けた」

「誘い、ですか？」

「正確には、誘いと警告だ」

警告、という言葉に姉妹は顔つきを厳しくする。

「警告とは穏やかではありませんね……」

「確かに穏やかではない。だが、気付いているだろう？ 先代のサ
ンディアル国王は賢王だった、ゆえに私は彼と友好関係を築いた。
だが、今の王は悪い王ではないが、先代と比較され、キナ臭いこと
をしている貴族も多くなつたと聞いている」

そんな時に、この騒動だ。

「友人は「帝国」へ身を寄せないかと誘ってきたのだ」

「そ、それは……」

「いくらなんでも、無理では？」

姉妹が驚くのは当たり前である。

いくらエルフとはいえ、人間と友好を築き、帝国ではなく連合側に着いたのだから。

「正直に言つと、私も無謀だと思った。何かの罠ですらあるかもしれないと思ひもした。だが、向こうは本気で言ってきている。そして帝国もそれは承知しているという」

驚きを通り越して、驚愕した。

「聞きなさい。帝国は人間の「連合」という脅威に、我々異種族も一致団結するべきだと考えているそうだ。それに、帝国には人間も暮らしている、それは知っているな？」

二人は頷く。

「人間は時に恐ろしいことをする。同じ人間でありながら、立場の違いで同じ人間を家畜のように扱ったりする者もいる。そしてサンディアル王国の姫もそうだ。そんな扱いに耐えられず、死を覚悟して帝国を目指した人間が優しく迎えられ、守られている。そして、帝国に暮らす人間も決して異種族を裏切らない」

そのことは知っていた。

帝国で自分たちに向かってきた中には武器すら持たない人間も混ざっていたから。

「あまり悠長に考えている時間はないと思う。サンディアル王国がどう動くのか、いつ動くのか、それに怯えるのならば、帝国に行くのも一つの手ではないかと思う。仮に、人間と友好関係を築いていたことで何かがあれば、私たちの首で済ませてもらえるよう懇願するつもりだ」

最悪の場合は一緒に死んでくれと言う父に二人は躊躇わずに頷いた。

そのくらいの覚悟は里を出て、勇者の味方をした時からできている。

「これは希望的なことだが、仮に私たちの首も繋がり、帝国で暮ら

すことができれば……あの小僧と再会できるかもしれん」

その言葉に、二人はハッと顔色を変える。

考えてみればそうだ。

シェイナリウスとレインは勇者が生きっていると信じている。なら、勇者はどこにいる？

答えは帝国だ。

その可能性が一番大きいのだ。

「ふう、今日はこのくらいにしておこう。明日、他の者も集めて最終的な決議を取ろう。今日はゆっくりと休みなさい、休みなしで里へ戻ってきたのだろうか？」

目を輝かす二人に苦笑しながら、父は告げる。

すると二人は、忘れていたとばかりに、今更ながらに疲れた顔をする。

「わかりました、父上。今日は休ませて頂きます」

「はい、父上。お言葉に甘えさせていただきます」

そう言っつて、頭を下げると二人は部屋へと向かう。

残されたハイアルウスは、娘たちが消えたことを確認すると、大きくため息を吐いた。

そして、手を伸ばし半分だけ中身が残っている酒瓶を眺める。

「馬鹿者が……まさか味方に裏切られるとはな、残り半分を一緒に飲むという約束はどうすればいいのだ？」

死んでいないと信じている。だが、もしかすると思ってしまう自分がいることに気付く。

そして思い出す。

初めて会った時は、礼儀のなっていない小僧だと思った。今でもそう思っているが、少しだけ違う。

礼儀はなっていないが気持ちの良い人間だと思った。自分と友好関係を築いた先代のサンディアル国王とはまた違うタイプであったが、人間を気に入ったのは二人目だった。

少しだけ荒れていた過去を感じさせる雰囲気を持っていたが、あまり気にはならなかった。

父親から見てもどうかと思うほどの娘からの扱きを受けても、必死で耐えて、人間嫌いのシェイナリウスが師匠となった。

それがきっかけで少し酒を飲ませてみたら、年頃だからだろうか、飲みなれていないからだろうか、盛大に酔っ払って、エ口話をはじめめて絡んできてたことは一年経った今でも鮮明に覚えている。

つい、悪ノリをしてしまい、エ口話に男性陣で華を咲かせていたところ、自分が妻に、勇者がシェイナリウスにシバキ倒されたのはできれば忘れたい思い出である。

「まったく、あのエ口小僧め…… たった一年で随分と強くなったと感心していたらこれか」

いっそ残りを一人で飲み干してやろうかと思った。

だが、やめる。

「もう一度一緒に飲みたいな、そしてまた馬鹿な話をしよう……」

必ず勇者は生きている。

そう強く信じて、ハイアルウスは酒瓶をしまう。

そして、その翌日。彼等エルフの部族は、帝国へ亡命することを決めたのだった。

「私の名前はリオーネ・シュメールだ。君の名前は？」

「そう問われて、自然と名前を口にしていった。」

「……………桜井未来路」

「サクライミクロ……………それが、君の名前かい？」

頷いた、はずだがあまり首が動いた感じがしなかった。

瞼が重い、いや体中が重い気がする。

そして何よりも、心が痛かった。

「君が目を覚ますのを、この二週間ずっと待っていたよ」

嬉しそうな女性の声、視界は少しぼやけているのではっきりと顔が見えない。

だが、声の心当たりがあった。

「この声……………聞いたことがある。アンタ、魔王か？」

特に質問したつもりではなく、思ったことが口に出てしまった。

同時に、女性が息を呑むのがわかる。

そして、もう一人もだ。

桜井未来路と名乗った少年は、もう一人誰かがいると理解した。

「気付いてしまったか。しかし、私の声は仮面によってわからない

ようにしていたんだが……」

そこまで言っつてリオネは気付く。

仮面が割れた後、メイドたちと会話していた時に意識があったのだ。

「……ま、まさか、君は……すべてを知っているのか？」

「……その反応からすると、夢じゃなかったみたいだな。悪い夢であればいいなって思っつてたんだけど」

「ッ……すまない」

やめてくれ、とミクロは苦笑いを浮かべる。

「アンタが悪いわけじゃないのに、なんで謝つてんだよ？」

おかしな奴だと、言う未来路にリオネは返事ができなかった。

何故なら、ミクロの瞳から涙が零れていたから。

どう、言葉を掛けて良いのかわからなかった。

「やっぱり本当だったんだな……俺は道具で、囿か……まさかあんなに優しくつた姫さんが俺のことを道具としか思っつていなかっただなんて、笑えるよ。なあ、笑えるよな？」

「笑えるものかつ！」

自嘲めいた「元勇者」の言葉に、「魔王」リオネ・シユメールは怒鳴るようにはつきりと言つた。

「笑えるものか……君は道具じゃない。君は怒つて良いんだ、憎んだつて良い、君が召喚されるきつかけとなつたのが「魔王」である私なら私のことを憎んでくれても構わない」

「魔王様！」

魔王の言葉に、思わずメイドが口を挟む。

そんな言葉を掛けて本当に勇者が彼女を憎んだらどうするのだと、今は動けなくてもいずれは動ける。その時になつたらどうするのだと。

しかし、魔王の言葉にも、メイドの心配も裏切られることになる。

「なあ、魔王さ……」

「なんだ？」

俺を、殺してくれないか？

「ッ……！」

リオーネは強く唇をかみ締めた。

彼が聖女の独白を聞いていたと知ったとき、もしかしたら言われるかもしれないと頭をよぎったりもした。

だが、実際に言われると辛い。

「何度か、考えたことがあるんだ。死ねば、元の世界に帰れるのか
なつてさ……ずっと試す勇気がなかったけど、今なら怖くない」

疲れてしまったのか？

もう立ち上がれないのか？

リオーネは心の中で疑問を抱く。しかし、同時に無理もないだろ
うとも思つ。

勇者召喚魔術でこちらの世界へ呼び出され、戦いと旅の一年。き
つとあつという間の出来事であり、様々なことが起きただろう。苦

労も、死に掛けたことも、悲しみもあつただろう。

それゆえに、彼には仲間は大事だったはずだ。大切だったはずだ。だと言うのに、彼の仲間は　聖女は彼を道具と言った。

彼の気持ちを、彼女は理解できる、とは言わない。

だが、辛くて、心がポロポロになってしまっているだろうとはわかる。いや、そのくらいメイドにだってわかる。

「駄目だ」

はつきりと、彼女は言った。

「勇者」はもう「勇者」ではない。心が折れた、仲間に裏切られ心を折られた弱い少年だ。

辛いだろう、痛いだろう、きつと泣き叫んで暴れたいだろう。

だからと言って……

「死ぬことは絶対に駄目だ」

「……どうしてだよ？」

「わからないのか？」

「……わからねえよ。わからねえに決まってるだろう！　道具だつて言われて、簡単に捨てられて、こんな馬鹿みたいに辛いのに、しんどいのに、なんで死んだらいけないんだよ！　殺してくれないなら、勝手に死んでやるよ！」

未来路はベッドから起きようとするが、一週間も重症で眠っていたのだ。まともに動けるはずもない、だが、それでも意地だけでベッドから降りようとして無様に転ぶ。

「はっははは……笑えよ」

「笑うものか、何もおかしくなどない」

「なら哀れで見ていられないか？」

「そんなことは思ってもいない」

「じゃあ、何を思っているんだよ！」

ずっと眠っていたせいで視界がぼやけていたのではない。

涙を流しているから、視界がぼやけているのだ。

しかし、未来路はそれに気付かない。

リオーネは未来路を優しく支えると、ベットに戻るように促す。

そして……

「私は君に生きていて欲しいと思っている。色々な話をしてみたい
と思っている。君の故郷の話を知りたい、君のことを知りたい、私
のことを知って欲しい。そう強く思っている」

彼は返事をしない。

「ここで死んでしまったら悲しむ人が本当にいないのかい？」

「……俺は道具だぜ？ 誰が、悲しむんだよ？」

自嘲しようとして、もうそれすらできずに顔は涙でグシャグシャ
だ。

「赤髪の少年剣士は聖女の行いに本気で怒っていた」

「……」

「エルフの女性は君のために怒り、聖女を殴り飛ばしていたよ。魔
術師の少女ともう一人のエルフも君のために涙を流して、呆然とし
ていた」

彼女は未来路をベッドに座らせて、再度問う。

「本当に、君が死んだら悲しむ人はいないのかい？」

「……………」
「聖女は君を道具だと言って裏切った。だけど、君の仲間の内のたった一人だ。全員が君を裏切ったわけではない」

もつともあの状況ではそう感じてしまうのも無理はないと思う。

「裏切られたことは受け入れるべきだ。そこで憎んでも、恨んでも死んでしまえばそれでお終いだ。そもそも、死んで本当にもこの世界に帰れるのかい？ 自暴自棄になるのはやめるんだ」

「……………ちくしょう、はつきりと言いたいこと言いやがって」

「す、すまない……………私はこういう性格なのだ。だが、君には同情などよりもこのようにはつきりとした態度の方が合っていると私は思った。君はきつと、今を乗り越えられると信じているから」

どうしてわかるんだよ、と未来路は問う。

リオーネは笑顔で答えた。

「今まで、「勇者」を名乗る者は何人も見てきた。だが、君ほど力を持っていながら、君ほど私を殺す気が無い「勇者」を私は初めてみたんだ。そして君は、異種族との友好関係を深めたいと思っていることも聞いた。そんな懐の深い「勇者」と初めて出会ったんだ」

だから、と彼女は彼を優しく抱きしめる。

「負けないで欲しい。たった一人、自分だけのことしか考えられないような、偽りの聖女などに負けないで欲しい」

「でも……………あの人は、優しかったんだ」

「うん」

「知らない世界で一人ぼっちだった俺はずっと不安だった。いきなり勇者なんて言われて、生き物なんて殺したこともなくて、それを

ずっと支えてくれたのは姫さんだったんだ」

「うん」

「……ちくしょう、ちくしょう、ちくしょうっ！」

涙がボロボロと零れる。

悔しくて、悲しくて、これでもかというくらい涙が零れてくる。

胸が痛い、心が痛い、張り裂けてしまいそうだ。

「泣くことは恥ずかしいことじゃない。泣いていいんだよ、泣いて、泣いて、心が壊れないように、涙と一緒に辛い気持ちも、痛い感情も流してしまおうといいよ」

優しい「魔王」に抱きしめられて、裏切られた「元勇者」は泣き続ける。

死にたかった。死んでしまいたかった。

だけど、本当に少しだけど、彼女の優しさに救われた。

ずっと我慢していた勇者の一年間は、この日終わりを告げたのだ。
った。

2

「裏切られた勇者目覚める」(後書き)

今回は、聖女はお休みです。次回、登場しますのでお楽しみにしていってください！

ご意見、ご感想、ご評価を頂けるととても嬉しいです。どうぞよろしくお願いします！

3

「初代魔王」（前書き）

累計PV146000、ユニーク23000を越えました。お気に入り件数も1700件を超えて驚きながらも本当に嬉しい限りです！
！ どもありがとうございます！

また、日刊ランキングでは1位を、週間ランキングでは11位という結果に、驚きを通り越して驚愕しております。

本当に皆様のおかげです。どもありがとうございます！

ストラトス・アディールとキア・スリーズが、エルフのウォーカー姉妹が姿を消してから二週間が経った。

アンナ・サンディアルは、順風満帆に進むと思っていたことの一部が思い通りになっていないことに強い苛立ちを覚え始めていた。

「どうしてストラトス君とキア君が保護できないのかしら？ ちゃんと私の名前は出しているの？」

はい、と返事をする部下に、ますます訳がわからないという顔をする。

そんな彼女に、部下は言い辛そうに言葉を続ける。

「アンナ様の命令であるなら、その……なお更抵抗すると言って戦闘にまでなってしまうました。英雄である二人と戦うなど、本当に申し訳ございません」

「謝る必要はありません。無抵抗にやられてしまうわけもいかないでしょう。それにしても、私の名前を出すとなお更抵抗するなんて誰かに何かを吹き込まれたのかしら？」

「もしかすると、エルフの姉妹になにか言われたのでしょうか？」

「そうね、その可能性も高いですね。これだから異種族は信用できませんね」

アンナは不快感を隠そうとはしない。

いや、する必要がないのだ。部下も同じように、エルフに対して不快感を抱いているのだから。

「エルフの隠れ里はどうでしたか？ 先日、軍を送ったと聞きまし

たが？」

「はい、残念ながら、既に隠れ里に誰一人おりませんでした。国王様宛に手紙が一通だけ残されている以外にはなにも、と聞いております」

「手紙？」

「はい、私はそう聞きました」

「そうですか、わかりました。ご報告どうもありがとうございます
た」

花の咲いたような笑みで兵士を労うと、兵士は顔を赤くして必要以上に丁寧に一礼すると、慌てたように部屋から出て行く。

その様子を微笑ましく眺めるアンナであったが、兵士の足音が遠ざかると、ふいに浮かんでいた笑みを消した。

「どうしてかしら？ 上手くいつているはずなのに、いいえ、上手くいつているのに。どうして、こう些細な所で思い通りにならないのかしら？ お父様への手紙？ そんな話は私は聞いていませんよ、
一体内容は？」

部下の言葉ではないが、もしかしたら本当にウオーカー姉妹に何かを吹き込まれたのかもしれないと思ってしまう。

「やはり「勇者様」と一緒に殺しておけばよかつたかしら？」

そう思い返して、首を横に振るう。

いや、それは不可能だった。

「魔王」を殺すためだけに執念を掛けて開発した魔術の発動で、あの時のアンナには既に戦うだけの魔力は何も残されていなかった。閉じ込めた者を確実に殺すことだけを考えて考え抜いた魔術だ。その魔術には大量の魔力の消費が難点として残されている。まだまだ

だ改良が必要だ。それに、魔術の発動までに時間が掛かる。詠唱は
いらぬ、道具も要らぬ。だが、時間がかかるのだ。

そのもう一つの難点は「勇者」という囿で解決できた。

もし、魔力がまだ残っていて同じ魔術ができるとしてもエルフの
姉妹を殺すには困がなかったのだ。それ以上に、エルフが二人、
しかも片方は大陸でも上から数えた方が早い魔術の使い手である。

魔術が破られてしまう可能性が大きかった。

それを考慮して、「魔王」ですら「勇者」と二日も戦わせて疲弊
したところでようやくと思ったのだから。

「やはり問題点は多いですね」

思わずため息を吐いてしまう。

だが、仮にエルフの姉妹をあそこで殺せることが可能であっても、
それはしなかったらと思う。何故なら、それではエルフが二人
死んだという事実しか残らない。

裏切りにあった、実は帝国側だったと後から言ったとしても、ど
うも決め手に掛けてしまう。

それならば、英雄として帰ってきた自分が、国を民を、エルフは
危険であると誘導した方が効果的なのだ。

自実、それは上手くいっている。

「エルフに関しては問題はないはず……だけど、やはり手紙が気にな
りますね」

首を傾げるが、それだけで解決するとはアンナ自身思っていない。
い。

そうなる、直接父に問うしかないだろう。

決めれば行動は早いほうが良い。

そう思って立ち上がり、ふと笑みを浮かべる。

「場合によってはストラトス君とキーアちゃんにお仕置きをしないとけないのかしら？ それとも……いいえ、それはまだ決断するには早いわね。少し、疲れが溜まっているのかしら、どうも不快感がしますね」

きっと誰が彼女を見ても、決して不快感がするようには見えないだろう。

可愛らしく、優しげな笑みを浮かべ、まさに聖女という名の通りなのだから。

アンナ・サンディアルは思う。

私は聖女であると、英雄であると、そして将来の王であると。

そんな自分が顔を曇らせていたら、民は不安になる。それは上に立つものとして駄目だと思っている。それが辛いと感じたことはない。

「だって、本当に楽しいのですもの」

フッフ、と彼女は笑う。

可憐に花のように、優しく聖女のように。

彼女は今日も楽しく、幸せに生きている。

「くそっ！ また追っ手がよ、最近ドンドン手荒になってきたぞ！」

赤髪の少年、ストラトス・アディールが剣を振るい、サンディアル

ル王国の兵士の剣を受け止める。

数は五人。

多くはないが、少なくもない。

正直、倒すことはできないだろう。

ストラトスは、一四歳というまだ子供である。そんな子供が実戦を経験しているとはいえ、大人の兵士相手に、それも五人を相手に勝てるほど世の中は甘くはない。

だが、彼の後ろには頼もしい仲間がいる。

「ストラトス、行くよ！」

「おうっ！」

横へ飛びのくと、背後から雷が走る。雷の攻撃魔術だ。

轟音と共に、五人の兵士を巻き込んでいく。

単純だが、殺傷能力の高い攻撃魔術だ。

雷撃に吹き飛ばされ、意識を失っているのを確認すると、ストラトスは剣を柄に収めて大きく息を吐く。

「ふう……これで何度目だ？ 最初は話しかけてきてたのに、最近じゃあいきなり切りかかってくるぞ。案外、俺たちもシェイナリウス様たちみたいに悪い噂でもされているかもよ？」

「別にどうでもいいよ」

素っ気ないキア・スリースの返事に、それもそうかと思う。

どうせもう、サンディアル王国に戻るつもりはないのだから。どうとでも、好きなように言えばいいと思う。

「そういえば、そろそろよね。「あの人」がいる街って」

「ああ、ようやくたどり着いたな。サンディアル王国国境の街、サイルアだ」

長かった、とストラトスは思う。
ようやく国境だ。これで大陸北部へ入れる。

「でも、大丈夫かな？ あの人は味方をしてくれると思う？」
「多分、大丈夫だと思う。真実を言えば、信じてくれるよ」
「それで信じてもらえなければ？」
「逃げる！」

即答するストラトスに、キアは一人ため息を吐く。
一つ年下の少年の頭の中は単純のようだ。だけど、それが羨ましい。

そんなことを思いながら、気絶している兵士を放って街へ向かうキアだった。

「着いたー！ とりあえず、手配書なんかは張られてないみたいだな。住民も俺たちを見ても特に変な反応もないし」

街へ着いてすぐ、住民からの視線を確認し、目立つ所に設置されているボードに自分たちの手配書などがないか確認をする。

「そうね、ちょっとホツとしたかな。いきなり住民全員が襲い掛かってきたら、さすがに逃げるのも難しいだろうしね」

それで、と彼女は続ける。

「それで、あの人はどこにいるの？」
「ええっと、確か……街のはずれにある教会にいるらしいんだけど、どこだろうっ？」

そういえば、知らないな……と、呟くストラトスに、キアは引きつった顔をする。

どうやら帝国まで行くには自分がすっかりしないといけない、と心底思うのだった。
そんな時だった。

「ストラトス・アディール？ キア・スリーズ？」

突然、名前を呼ばれて振り返ると、一人の女性が立っていた。

凜とした金髪の女性だった。背筋がピンと伸びていて、女性にしては高い背丈が更に高く見える。

月と剣の紋章を刺繍された、紺色の修道服に身を包む彼女は月の女神アルテの信仰者とわかる。

そんな修道服に不釣り合いな剣帯と剣を腰に下げている金髪の女性こそ、二人の探し人だった。

「どうして、二人がここに？」

「カーティア様！」

ストラトスが大きな声を出す。

金髪の女性、カーティア・ドレスデンは二人を見つけ、驚いた顔をしている。

「良かった、教会がわからなかったからどうしようかと思っていたんですよ！ お久しぶりです！」

「お久しぶりです、カーティア様」

「ああ、久しぶりだな、二人とも。元気になっていたか？」

最初は驚いた顔をしていたカーティアだが、すぐに柔らかい笑みを浮かべると二人を抱きしめた。

「本当に、カーティア様は教会で生活しているんですね」
「ああ、あの馬鹿者が死んだと聞いてな……正直シヨックだったが、あの馬鹿が安らげるようにと毎日祈らせて頂いている」

カーティア・ドレスデンはサンディアル王国の貴族であるドレスデン家の長女であり、ストラトスたちと同様に勇者と共に戦った仲間であった。

彼女は「魔王」との戦いの前に、大怪我を負い、戦線を離脱しなければいけなかったために、あの場にはいなかったのだ。

二人を放すと、辛そうな表情を浮かべるカーティア。

「不甲斐ない……私が戦線離脱などしていなければ、死なせはしなかったのに……」

心から悲しそうな顔をする彼女を見て、ストラトスとキアは互いに頷く。

「カーティア様、実は大切な話があるんです。聞いてくれませんか？」

「できるだけ、人がいないところが好ましいです」

何をいきなり、と思ったが、二人があまりにも真剣な顔をしているので、カーティアも何かがあると悟って頷く。

「わかった。人が近寄らない場所を知っている。そこで話を聞こう」
ストラトスとキアは、こうしてかつての仲間と真実を話すことになるのだった。

「ここに、君に見せたいものがあるんだ」

目を覚ましてから二週間が経った。

「元勇者」桜井未来路は、日常生活に差支えがないほど回復していた。

未来路は特に何をするわけでもなく、ベッドで過ごす日々だ。毎日のように様子を見に来てくれるリオネや身の回りの世話をしてくれるメイドが話しかけなければ、自分から話そうともしない。

死のうとは思っていないようだが、これからどうすればいいのだろうか、どう生きればいいのだろうか、と悩んでいるように感じたとメイドは言う。

そして今日、「魔王」リオネ・シユメールから見せたいものがあると、魔王城の中、案内された部屋にいる。

「ここは初代魔王の私室だ」

「……はい？」

「うん？ ここは初代魔王の私室だと言ったのだ。ちなみに、私は七代目である」

いや、そうじゃなくて……と、未来路は言う。

「これが、初代魔王の私室だって？ どう見ても……」

「日本を思い出すか？」

部屋自体はそれこそ洋風だが、できるだけ日本の物に近いものを

揃えたことを感じさせるこの部屋が、初代魔王の私室だとは到底思えなかった。

そして、もう一つ。

「……ああ。アンタ、日本を知ってるのか？」

「知っている、とはいえ話だけだがな。私は、君が異世界人、それも地球出身と聞いた時、本当に驚いた。もしかしたら、とも思った。そして君の名前を聞いた時、核心に変わった。君は 日本人だね？」

なんと答えていいのだろうか、よくわからないまま頷く未来路。

「驚くのも無理はないね。こんな偶然、いや奇跡と言っべきかな？ きつと生涯において二度と起きないだろう。さて、話を戻そう、どうして初代魔王の私室に日本を感じるのか、どうして私が地球を、日本を知っているのか」

それはね、初代魔王も日本人なのだからだよ。

未来路は、リオーネが何を言っているのかわからなかった。
今、なんて言った？

「驚きに声が出せない、という感じだね。だけど、もう少し驚いてもらうことになる、続けるよ」

リオーネは驚き固まっている未来路から部屋に視線を移して話続ける。

「初代魔王は、勇者召喚魔術によってこちらの世界に召喚された、日本人だ。そして、私はその子孫だ」

「ま、まさか……」

「君と話がしたい、君のことを知りたい、私のことを知って欲しいと言った意味が、これでわかってもらえると思う」

そう言って、一つの箱から、紙の束と服を取り出した。

「日本語？ それに、これは服？」

「紙の束は、ボロボロで読めるところは少ないが、初代魔王の日記のようなものだ。そして、その服はこちらにやってきた時に着ていた服だよ。こちらあまり保存状態が良くないね」

そう言って、リオーネはその二つを未来路に渡す。

「読めるかい？」

そう問われ、未来路は紙の束に目を通す、確かにボロボロとなっ
てしまっているが、まったく読めないことはなかった。

「石動良二……これが初代魔王の名前か？」

「そうだ。イスルギという帝都の名は、初代魔王石動良二の家名から取ったものだよ」

そういえば、と未来路は思い出す。確か、帝都の名前がイスルギ
だったことに。

日本人の苗字みたいだな、とは思っていたけれど、本当にそうだ
ったとは……。

さすがに驚くしかない。

「ちょっと待ってくれ」

「なんだい？」

「話がおかしくないか？ アンタ、今さっき、勇者召喚魔術で召喚されたのが、初代魔王だって言わなかったか？」

「真実だ。かつて先祖は勇者として今はもう存在していない国に召喚された。そして正義感があった彼は困っている人間のためにと、勇者をすることになったのだ。急に異世界へ連れられたというのに、それを怒りもせずには戦う決意をしたそうだ」

なら、どうして勇者が魔王になったんだ？

「君と同じだよ。裏切られたからだ」

「……ッ」

「仲間に殺されかけたのではない、ずっと騙され続けていたのだよ、先祖は。少し話をしよう、どうして勇者であった先祖が初代魔王となったのか」

彼女は未来路から紙の束と服を受け取り、一度箱に仕舞うと、彼の目を見て話し始める。

「先祖が召喚されたのは約二〇〇〇年前だ。その当時から、人間と異種族の間には深い溝があり、当時はさらに各部族、種族が人間と戦っていた乱世のような時代だったと聞いた。異種族の力を脅威だと感じ、何とかしようとすがりついたのが勇者召喚魔術であり、それによって召喚されたのが我が先祖なのだ」

そんなに古い時代から、異種族と人間に溝があったのか……。

そして、そんな古い時代に、自分と同じ日本人が召喚されていたのか、と思う。

「当たり前な話だが、先祖はこちらの世界の事情は知らない。国がどうして異種族と戦っているかも知るはずがない。だが、理由も知

らずに戦えない、そして聞いた理由がまったくの嘘だったのだよ」「それは……」

「人間は言ったのだ。異種族、当時は鬼族と戦っていたらしいが、彼等が人間を家畜のように扱うと。攫われ労働力にされると。実際は、逆だったのだが、先祖がそんなことを知るわけがなく、鬼族と戦ったんだ」

しかし、あつけなく終わりは告げた、とリーネは言う。

「すぐに嘘だとばれたのだ。戦いが終わり、なんとか鬼族との戦に勝った人間の国が行ったことを目にしてしまったから」

「何を、したんだ。人間は？」

「虐殺と略奪」

「ッ……」

当時の人間は、鬼族を家畜よりも使い勝手が良い労働力として使っていたのだという。

その扱いに鬼族たちは逃げ出し、戦うことを決意する。そして、他の鬼族も仲間になってくれたのだ。

しかし、そのせいで戦となってしまった。

見た目は人間とさほど変わらない鬼族だが、彼等は強い。人間などとは比べ物にならない怪力と頑丈さを持ち、動きも遅くはないのだ。

人間はそれに対して魔術で反撃をして、泥沼になっていったという。そこで現れたのが「勇者」だ。

しかし、勇者は見てしまった。戦が終わった後、無抵抗にも関わらずなぶり殺しにされる鬼族を。家畜同然の、いや敵対したことでそれ以下の扱いを受ける鬼族をみてしまったのだ。

「そして、勇者は王を問い詰めた。なんだこれは、なんだあの扱い

は、と」

そこで初めて勇者は真実を知る。

戦で勝って、上機嫌だった王は饒舌に喋ったという。

鬼族は国に使える家畜だったが、ある日待遇に不満を持って反旗を翻したのだと。家畜の分際で、我が国に。

だが、勇者が元通りにしてくれた。本当に感謝をしよう、褒美は何が良い？ と、尋ねられ。

鬼族の解放を。

と、勇者は言ったのだという。

しかし、反応は大笑いだった。馬鹿にもされたという。

そんな時に余興が始まった。

鬼族の少女が、その国の王子と戦うとのことだった。

枷を嵌められ、鎖に繋がれた鬼族の少女は痩せこけていて、戦えるはずもないと勇者は思った。だが、彼女はその理不尽な状況の中、戦ったのだという。黽られながら、それでも何度も立ち上がる彼女を見て、勇者はなぜだと叫んだ。

息子の活躍を見て、機嫌をさらに良くしていた王は勇者に教えてくれた。

妹の解放のために戦っているのだと。勝てなくても、ある時間まで耐えれば解放してやると約束をしたのだと。

だが、王は笑った。

そんな約束など始めから守るつもりはない。そもそも、人間が、力と頑丈さが取り柄でしかない鬼族などと約束などをかわすものかと、笑う。

次の瞬間、王の首が宙を舞った。

笑って見物していた貴族たちも、剣で鬼族の少女を黽っていた王も、枷と鎖で繋がれた鬼族の少女もその光景に驚き、動きを止め

たのだという。

貴様らは、人の皮を被った悪魔だ！ 貴様らは、人ではない！

そう吼えた勇者はその場にいる、鬼族の少女以外をすべて皆殺しにした。

勇者の乱心と兵が駆けつけるが、その兵すらもすべて殺した。

守っていたはずの国民も殺し、鬼族を解放し、勇者は宣言する。異種族は私が守ると。貴様らのような、血も涙もない人間から異種族を守ってみせると。

「そして、勇者は鬼族を率いて大陸北部を目指すことになる。ここですでに北部に暮らしていた他の異種族と色々あるのだが、数年を掛けて、彼は異種族をまとめ、「帝国」を作り上げた。そして、人間たちは彼を恐れ、勇者などは最初からいなかったことにして、彼を「魔王」と呼んだ」

これが帝国の、魔王の始まりだよ、とリオーネは言う。
ずっと黙って聞いていた未来路自身、あまりにも話に着いていけないというのが正直な所だった。

「余談だけれど、初代魔王はきつかけとなった鬼族の少女との間に子供を儲ける。その子供が次の魔王となり、また別の異種族と子供を儲ける。意図してやっていたわけではないが、そうやってしまった。そして、私は人間、鬼族、エルフ、獣人など色々な血が混ざった混血なんだ」

「……どうして、どうして俺にこんな話をしたんだ？」

「先祖の望みでね、いつか自分のように利用された勇者が現れたら、いつか自分と同じ故郷の人間が現れたら、こんな人間がいたということ覚えていて欲しいのだと言ったそうさ。とはいえ、今までそ

れはなされなかつたんだが、私の代でようやく先祖の願いは果たされた」

ここからは、先祖を抜きにして私の話になる。
と、前置きをしてリオーネは話す。

「私の祖母が初代魔王から聞いた日本の話を良くしてくれた。私にとってそれはお伽話だった。だから、いつか地球から人間が来たらどのような暮らしをしているのか、どのような世界なのか、ずっと聞きたかつたんだ」

それは「魔王」リオーネ・シユメールではなく、リオーネ・シユメール個人としての願いだったと言う。

「本音を言ってしまうえば、君とは違うけれど、裏切られた人間の勇者がいたということを知って欲しかったのもあるよ」

「俺は……俺は……」

「今は無理して答えなくて良いよ。でも、君はいずれきつと、選択を迫られると私は思う」

「選択？」

「そう。このまま何も考えずに立ち止まるか、これから考えて動き出すか……とはいえ、しばらくはまだ安静にしていた方が良く、今日は何かのきっかけになればと思っここへ連れてきたんだ。もちろん、先祖の望みも叶えたかったこともあるけどね。さあ、そろそろ戻ろう」

彼女は優しく未来路の手を握り締めて部屋の外へ行く。

そして扉に鍵を閉めると、未来路に渡す。

「君にしばらく預けておくよ。今日は一緒に来たけれど、一人でゆ

つくり考えたい時に、この部屋を使ってくれても構わないよ。先祖も同じ故郷の人間が使ってくれば喜ぶと思う」

未来路は鍵を受けとるか、取らないか迷ったが、受け取ることにした。

そして、二人は会話も無く魔王城を後にする。

魔王城から戻り、一人になった未来路は、食事をもらい、ベッドで寝転んで鍵を眺めながら未来路は呟く。

「俺はこれからどうすればいいんだ？ あの女は、どうして……ちくしょう、何もわからない、わかりたくない」

未来路はベッドの上でうずくまる様に体を小さくする。

まだ、「元勇者」は何もすることができない。何をすれば良いのかもわからない。

目を瞑れば、一年間の旅を思い出す。辛いこともあった。悲しいこともあった。出会い、別れもあった。そして最後に裏切られた。一体、初代魔王はどんな気持ちで帝国をつくったのだろうか？

「何にも、わからねーよ……」

「元勇者」は未だ迷い続けるのであった。

3

「初代魔王」（後書き）

今回の話では二週間が経っています。ストラトスたちはかつての間を訪ね、未来路は初代魔王のことを知ります。少しずつですが、物語が動いていきます。

ご意見、ご感想、ご評価等を頂けると嬉しいです。どうぞよろしく
願います！

4 「勇者の仲間」(前書き)

ランキングでは日間、週間ともにBEST5に入れていただき、本当に嬉しいです。

月刊ランキングでも32位と、驚きました。これも読んでくださる皆様のおかげです。

本当にどうもありがとうございました！

「そ、それは本当なのか！ まさか、まさかそんな、あの聖女様がそんなことを……」

カーティア・ドレスデンはストラトス・アディールとキア・スリーズから真実を聞き、そのあまりにもの話に顔色は蒼白となっている。

「本当ですよ。カーティア様！ 俺はこの目で見ました」

「私もこの目で見ました。信じてください」

二人の真剣な眼差しが嘘を吐いているとは思えない。

「二人の話信じよう……しかし、ならばどうして、どうして私に教えてくれなかったのだ！ 教えてくれれば、私はあのアンナ・サンディアルを八つ裂きにしてやったものを！」

彼女は怒りに震えていた。

無理もないと、二人は思う。自分たちでさえ、腸が煮え返るような思いをしたのだ。

それでも誰を信じていいのかわからずに、どうしていいのかも分からずに、誰が敵で、誰が味方なのかわからなくて、結局そのまま何もできないまま王都へ戻ることへなってしまったのだ。

誰もが状況を受け入れられず、呆然としたまま王都へ向かい。一度は、ストラトスもキアも、シェイナリウスやレインさえもお互いを疑ったのだ。

「すみません、でも俺たちだってどうしていいのかわからなかったんです」

「……そうだな、すまない」

ストラトスを責めて何になるのだ、とカーティアは思い、感情的になったことを恥じる。いや、感情的にならずにはいられないのだが、それでもまだ子供であるストラトスとキーアに怒りをぶつけるわけにはいかない。

怒りをぶつけるとすれば、アンナ・サンディアルと自分自身にだ。

「私は、私はなんてことをしてしまったのだろうか……お前たちの話が本当なら、私はあの女に勇者を頼むと託してしまったのに！」

ストラトスもキーアは何も言うことができなかった。

二人は知っている。

カーティアは「帝国軍」の將軍の一人と相打ちになり、共に重症を負った。その際に、アンナに勇者を頼むと託しているのだ。

あの馬鹿のことを頼む、悔しいが私はここまでだから……すまないっ！

あの時の言葉を今でも覚えている。本当に心からアンナにカーティアは未来路のことを託したのだろう。

そして、アンナは聖女のごとく優しい笑顔で微笑み「お任せください」と言ったのだ。

カーティアは自身が託した相手が、まさか裏切り、自分の大切な人を殺そうとするだなんて疑っていなかったのだ。しかし、彼女の思いも裏切られた。

「カーティア様……」

ボロボロと涙を零すカーティアに何を言っているのか分からず、二人はどうしていいのかと互いの顔を見合わせる。

そして、しばらく何も言わないでいこうと頷いたのだ。自分たちも、悔しくて、悲しくて、泣いて泣いて涙が枯れそうになるまで泣いたから。

どうして自分は強くないのだろう。どうして守られているばかりで、守ってあげられなかったんだろう。どうして身代わりにすらなれなかったんだろう。

後悔ばかりをしていた。

「すまない、無様なところを見せた」

「気にしません。私たちも同じでしたから」

時間が経ち、泣き止んだカーティアはバツの悪そうな顔をして、二人に謝るが、そんなことはないと言返事をする。

信頼していた仲間が信頼していた人間に裏切られたなんて、悲し過ぎるから。悔し過ぎるから。

「でも、カーティア様。俺は、キアは、シエイナリウス様とレイソンさんは、兄貴がまだ生きていると思っっています！」

「……ッ」

「だからこうしてここまでやっていました。私たちはこれから勇者様を探しに「帝国」へ、大陸北部へ行こうと思っています」

無謀だ！

そう叫ぼうとして叫べなかった。

何故なら気持ちがあるから。そして、可能性でいえば、一番高いのが帝国内で勇者が生きている可能性だ。

「分かっているのか、まだ帝国との戦が終わって一ヶ月も経っていないのだぞ？」

「もちろんっす」

「大陸中はもちろん、北部は特に、異種族とは違う、完全な獣である魔物も多く存在している。それでも行くというのか？」

「はい、私たちは覚悟の上です」

そうか、とカーティアは呟く。

そして、子供だと思っていた二人がここまでの覚悟を決めていることに驚き、まだ勇者が生きていることを本当に信じているということが良くわかった。

ならば自分も信じて、行動しよう。

「私も一緒に行こう」

「……え？」

二人は驚いた。

「何を驚いている。私も一緒に行くといっただのだ。私だっけと後悔していたのだ、最後まで一緒にいけなかったことを。そして、どこかで願っていた……ミクロがどこかで生きていることを」

カーティアは思い出す。

カーティア・ドレスデンは勇者と良好な関係を最初から築いていたわけではない。生真面目なところがあるカーティアと、結構いい加減で大雑把なところがあった「勇者」桜井未来路は良く喧嘩をした。

時には互いに剣を握り、ぶつかったこともあった。その一方で、いい加減なところがあっても物事をしっかりと見ることができて、

例え相手が強くても決して逃げない精神を持っていて、どこまでも仲間思いな勇者に少しずつ好意を抱いていた。

ストラトスとキアには兄のように接し、二人も兄のように思っていたらと思う。

いつの間にかカーティア自身も自らの背中を彼に任せ、互いに背中を合わせて戦った。

そして、気が付けば彼女は勇者に恋をしていた。

だからこそ、生きていると信じたい。いや、生きています。

「私は決めた。私も一緒にミクロを探そう！　そして、心配をさせたことを詫びさせてやる！」

それで自らが犯した失態を帳消しにできるとは思わない。

このツケは、自分が直接アンナ・サンディアルと着けよう。

「でもカーティア様は本当にそれでいいんですか？　もちろん、俺たちは頼ってきたからそう言ってもらえるのはめちゃくちゃ嬉しいんですけど……」

何かを気にするように、ストラトスは歯切れが悪く言う。

「うん？　戦力としては申し分ないだろう？　私にはミクロのような馬鹿みたいな魔力はない、シェイナリウス様のように魔術の天才でもない。だが、剣技で言えば私が仲間の中で一番であったはずだ」

それが自慢でなく、本当のことだというのは一緒に旅をした二人が良く知っている。

速さが自慢の剣技に魔術を使うことで、力を補い、補助や医療魔術も使える。

色々と偏っている仲間の中で、一番万能であったのは間違いなく

カーティア・ドレスデンだった。

「だけど、いいんすか？ カーティア様は貴族の……」

ストラトスが気にしているのもそのことだった。

頼るつもりがなかったとは言わない、むしろ頼るつもりでカーティアの元へ来たストラトスたちだが、彼女の立場を考えると色々まずいのではないかと今更ながらに思う。

そんな不安を察したのか、カーティアは笑ってみせる。

「気にすることはない。実は……実家とは縁を切られていてね」

「ええっ!？」

「どうしてですか!」

それこそ驚きだった。

「恥ずかしながら、戦線離脱をしたとはいえ、私も勇者の仲間であったことは間違いはない。王都で父は英雄の娘を持ったと大喜びで、どの有力な貴族と婚姻を結ばせようかと企んでいる。一度、王都へ戻って来いと迎えに来たが、私が生涯ここで祈り続けると言ったら親子の縁を切ると怒って帰ってしまったよ。もっとも、そう簡単に利用できる娘を手放さないと思うが、私は……すまない」

親子の縁など切れても構わない、そう言おうとしてカーティアは言葉を止めて二人に謝る。

二人の不遇は知っている。だと言つのに、自分は何を言っているのだろうかと恥じたのだ。

「あー、いや、別に気にされちゃうと逆に困るっすよ。なあ?」

「うん、確かに家族には恵まれなかったけど、家族以上の人と出会

えたから」

自分よりも二人の方がよほど大人かもしれないと、カーティアは思った。

「それにしても、カーティア様は一生兄貴のために祈り続けるつもりだったんっすね」

「ね、言ったでしょう。カーティア様は勇者様に惚れているって」
「なっ！ な、な、なにになに、なにを言っているんだお前たちは！」

いやいや、そういう態度とかとっちゃうと一発でバレバレですわら。

そう突っ込みながら、二人は笑う。

「きつと勇者様以外は気付いていましたよ」

「ていうか、兄貴が気付かなかったのが不思議っすよ」

二人の疑問を聞きながら、あうあうと顔を真っ赤にするカーティア。
ア。

本人は誰にも気付かれていないと思っていたようだ。

しばらく二人にからかわれながら、それでも久しぶりにカーティアは楽しいと思える時間を過ごせた。そして、未来路が生きていることを信じて帝国へ二人と共に旅立つことを改めて決めたのだった。

その頃、サンディアル王国では、国王が頭を抱えていた。

どうして、こうなってしまったのかと。

「何故だ、何故、どうしてこうなった！」

賢王であった先代と比較され続け、王として悪くもないが良くもないと思われ知らされた。

自身は連合へと加盟するという決断をしたが、周りの国々に流されるように決めてしまったという不甲斐なさもある。

とはいえ、連合に加盟したことでプラスは当たり前だがあった。

しかし、同時にマイナスも大きかった。

その最もが、「帝国」との戦だ。

サンディアル王国は大陸西部のはずれにあり、北部への境界を管理しているのがサンディアル王国である。

ゆえに、戦前に自然と自国の兵が多くなってしまつものも、仕方がないと諦めていた。

そんな時だった。娘の一人、アンナ・サンディアルが「勇者」を召喚したのだと聞いた。

さらには宮廷魔術師やサンディアル王国内の有名な魔術師を集め、一つの魔術も開発して見せた。

何をやらせても、姉に劣っていたアンナが自信をつけたのはこの頃からだろうと思う。良い傾向であると思った。

ゆえに、口約束だが、ことと次第によっては王位を譲っても良いと言った。もちろん、そう簡単に譲れるものではないが、臣下たちを納得させるほどの実績を残せばそれは可能であった。

そして、誰もが止める中、アンナは勇者と共に旅へ出て行ってしまった。無論、王自身も止めた。

だが、それを振り切り、飛び出して、いつしか聖女と呼ばれるようになり、そして英雄として戻ってきた。

親としてはこれほど嬉しいことはなかった。

だが、突然言い出した、エルフの危険性、そして友好関係の破棄

には正直驚きを通り越して驚愕させられた。臣下たちも同じであった。

確かにエルフは怖いと思う。先代は違ったようだが、自分は怖いと王は思っている。

強い魔力を持ち、魔術に優れ、人間の倍以上を平気で生きるのだ。人間は弱く、生も短い。だからこそ、エルフを異種族を怖いと思っていた。

アンナはそれを見事に利用した。

先代と、先代時代の臣下が居ない今、心の奥底で眠っていた恐怖が表に出てきてしまったのだ。そうするともう、隠すことが難しくなってきたりする。

だが、問題があった。

エルフの姉妹、シエイナリウスとレインは勇者と共に旅をし、魔王討伐の英雄でもあったのだ。それをどうするか、悩んだが結論は出てこなかった。

しかし、連合諸国が、エルフとの友好関係の破棄を進めてくる。自らの国にないものをサンディアル王国が持っていることが気に入らないゆえだと気付いていたが、いつのまにか話はどんどん進んでいってしまう。

そして、聖女であり英雄であるアンナの言葉に、民が上手く誘導され、表立って反対する者はいなくなってしまうのだ。

「勇者は死に、エルフとの友好関係も終わった。だが、異種族は北部に多く居て、魔物の問題は大陸中にある。我が国にはこれといった戦力がないのだ！」

もちろん、軍はあるし、勇猛な將軍たちもいる。

だが、他の国と比べると、戦力は低いだろう。

アンナが魔王を殺した魔術に期待したいが、これも改良が必要であり、なかなか難しい魔術であることからすぐには使えない。

問題は山済みだった。

そして、現状で頭を最も悩ませている問題がある

英雄の失踪だ。

若き英雄である、ストラトス・アディールとキア・スリーズが戦後すぐに姿を消してしまう。

アンナが保護するために兵を出すか、どうしてだか兵と戦ってしまふ始末だ。二人になにがあったのだ？

連合諸国の中には若き英雄を自国へ招きたいという声もある。他の国に先に保護されてしまうと、将来の戦力が奪われてしまうことになる。それだけは避けたかった。

そして、友好関係を築いていたエルフの長からの手紙。正直、読まなければ良かったと思う。

読んだのが自分だけで本当に良かったと思う。

「お父様、失礼します」

考えに没頭するあまりに、娘が部屋にやってきたことに気付かなかった。

慌てて手紙を隠し、平静を装おう。

「なんだ、どうした？」

「突然にすみません。あの、耳にしたのですが、エルフの長から手紙があったということですが……どうして私には教えてくださらなかったのでしょうか？」

自分の娘が怖いと思った。

「控えよ、アンナよ。確かにお前は聖女と呼ばれ、英雄と呼ばれて

いるが、それでも王ではない。あの手紙はエルフの長から王である私への手紙なのだぞ！」

「……申し訳ありません」

アンナは笑みを絶やさずに、そう謝罪する。

それが怖いと思った。

「まあ、そうは言っても、内容は一方的に友好関係を破棄させてもらうと書いてあり、その謝罪文だ。さほど気にすることでもあるまい」

「そうですね、汚らわしい異種族とこれ以上関わらなくていいのですから」

笑顔でそんなことを言う、娘に王は尋ねる。

「アンナよ、お前はこの国をどうしたいのだ？」

「ええと、どういうことでしょうか？」

「なに、お前は一年前に王になりたいと言っておった。そして、王位継承権の見直しも浮上している。だから聞いておきたかったのだ、この国をどうしたいのか、と」

なるほど、とアンナは頷く。

「私は、この国を人間のための豊かな国にしたいと思っています。連合などに頼らず、我が国だけで北部と渡り合えるように、強く豊かな国にしたいと思っています。可能であれば、領土の拡大も」

「……それは戦をするということか？」

「場合によつてはそうなりますが、隣国などと姻戚関係を結び、そこから時間をかければ決して不可能ではないでしょう。完全に我が国の領土とはならないかも知れませんが、それでも味方となるでし

よう」

婚姻関係を結んだくらいでは、そう簡単に物事は進むことはない。それはアンナも知っているはずのことだ。なのに、なぜ、どうしてこつも自信をもってはつきりと言えるのだらうか？

王には、それがまったくわからなかった。

そして、王として、父としても、聞くことができなかった。

勇者を殺したというのは、本当か？

そう聞きたかったが、娘が怖くて聞けなかった。

エルフの長からの手紙には確かに謝罪の文であった。しかし、それだけではなく、シェイナリウスとレインから聞いたということの顛末。

魔王を殺したのは功績だろうが、聖女が勇者を道具扱いし、魔王を殺すために囮にしたなどと民へ、他国へ知られたら一大事だ。

手紙の内容をそのまま信じたわけではない。だが、誇り高いエルフが嘘を吐くとは思えない。

そして、勇者を殺したのが真実なら、ストラトスやキアが姿を消した理由にも納得ができる。

だが どうして、そんなことをしたのか？

我が国が戦力がもっと欲しいことは知っているはずなのに、何を考えているのだ？

王として、親として、娘の心は何一つわからないのであった。

桜井未来路は、今日も一日呆然とした時間を過ごしていた。
あまり考えたくはない、だが、目を瞑れば考えてしまう。

初代魔王のこと、魔王リオネ・シユメールのこと、もうしばらく会っていないストラトス、キア、シェイナリウス、レイン、カーティア、そしてアンナのことを考えてしまう。

初代魔王は一体、どんな気持ちで魔王と呼ばれ、自らも魔王と名乗ったのだろうか？

今、ストラトスたちはどうしているのだろうか？ 彼等は自分のことを仲間だと思ってくれているのだろうか？

そして どうして彼女は俺を……

そこまで考えて、思考を止める。

「一年前まで高校生やった俺には問題が大き過ぎるよな……」

心からそう思った。

「こっごうせーってなに？」

部屋のは一人のはずだというのに、なぜか独り言に返事が返ってきた。

まさか、とは思って、一応ベッドの下を確認してみる……が、もちろん誰もいない。

すると、さらに声が。

「こっごうせー、こっごうせー！」

幼さを感じる声の主を求めて、声の方を向くと……

「誰だ、お前ら？」

「遊ぼう？」

「いや、質問に答えてねーし……」

翼の生えた子供三人が、一人ずつ子供を抱き上げて計六名。窓の外にいた。

この街に暮らす異種族の子供たちだろう。翼を持っているのは翼人といわれる種族だったなと思いつく。

「ていうか、危ないだろう……ほら、いつまでも飛んでないで部屋にこもって」

そうやって窓を開けてやると、ありがとー、という声と共にバサバサと羽を鳴らして入ってくる子供たち。

「それで、どうしたんだ？」

「うん？」

「いや、うん、じゃなくて……何しにきたんだ？」

「遊びにきたの！」

翼人の子供が一人満面の笑みでそう答える。

続けて、翼人の少女が。

「最近、新しくここに来たでしょう？ だからどんな人が来たのかな、って気になったの！」

「なるほど……」

まあ、子供にとっては好奇心の対象になっても仕方がないなと思

い。

まさか自分が元勇者だとは思ってもいないだろう。それを知れば、きつとこの子たちは逃げていくだろう。

なんとなく、それは寂しくて嫌だった。

だから、未来路は何も言わずに、そうかと頷いた。

「遊んでくれる？」

「え？ ああ、まあ、良いけどさ……何して遊ぶんだ？」

未来路の問いに、子供たちは普段はフラフラと町を飛んで遊んでいると言っただが、未来路は飛べない。

跳躍をすれば結構な高さまでいけるが、飛行は無理だ。

それを説明すると、じゃあ捕まる？ と、尋ねられたが、さすがにそれは無理だろうと苦笑してしまった。

その後、名前を聞かれ、名前を聞き、三人の翼人の他に、一人は獣人、一人は鬼族、そして最後の一人が人間だったことに驚いた。

そして、人間と異種族が仲良くしていることに驚きつつも、どこでもこういふ風に仲良くできれば戦いなんて起きないのにな、と心から思った。

「外へ行こう！」

痺れを切らした、翼人の子供リユーイが未来路の袖を掴んで翼をバサバサ。

どうやら部屋にいるよりも外で遊びたいようだ。

すると、他の子供たちもそれに便乗したので、仕方がないと思いつつもわかったと返事をする。

「やったー！」

「ちよ、嬉しいのは分かったから、引つ張るな！ ていうか、窓か

ら出ようとするな、俺は飛べないんだから……あ
「あ」

喜んだ子供たちがいち早く窓から飛び出して、未来路を引っ張るが、飛べない未来路はそのまま窓から落ちた。

ちなみに、未来路のいた部屋は二階であり、普通の人間なら、いや異種族でも種族によっては怪我できる高さであった。

だからこそ、子供たちは顔を青くする。

しかし、それは杞憂に終わった。

くるりと空中で一回転すると、音もなく地面に着地してみせる未来路。そんな彼に子供たちから「おー！」という声があがる。

「おー、じゃないだろう、ったく」

ぼやきながらも、こういうのも悪くないと思う。

子供は裏表がない。特に、目の前の子供たちは七歳か八歳くらいだろう。だからかもしれない。

久しぶりに、リオーネやメイド以外と会話をした未来路の心は少しだけ、本当に少しだけ軽くなった。

しかし、心配事が一つ。

今は、この家に自分しか居ないのだが、夕方になるとメイドが食事の仕度をしに、夜になればリオーネが様子を見に来てくれている。黙って出掛けていいのだろうか？

せめて書置きだけでもするべきか、と思った時だった。

「リユーイー！」

遠くから、一人の翼人の子供が勢い良く飛んでくる。どうやら、この子供たちの友達のようにだ。が、どうも様子がおかしいことに気付く。

翼人の子供は、リユーイにぶつかるとして止まると、大きな声で泣くように叫んだ。

「リユーイの妹が、ルルが！」

「ルルがどうしたんだよ？」

「薬草を取りに行くつて、街を出て森へ……」

その場にいる子供たちが大きな声で驚く。

「ど、どうしよう……」

「あの森は黒狼が出るんだよ、早く助けにいかない！」

「でも、どうしたら！」

「大人に頼まないと！」

それは難しいとすぐにわかる未来路だった。

黒狼は異種族とはまた違う、魔物であり、本能のまま生きる獣だ。大きいものは最大で五メートル近くまでに成長し、人間はもちろん、異種族でさえできれば相手にしたくない高位の魔物である。

未来路は自然と口を動かしていた。

「場所は分かるのか？」

「え？」

頭で考えたわけではなく、どちらかと言えば何も考えていないに近い。

「その妹の場所だよ、分かるのか？ 分からないのか？」

「わ、分かるよ！ 俺は兄貴だから、近くに行けば大体わかる！ だけど……」

居場所が分かってても、どうしていいのかわからないのだろう。
リユーイは今にも泣き出しそうだ。

「大丈夫だ」

まだ、自分にこんな気持ちがあったんだと思う。

「俺が守ってやる」

「え？」

「俺が守ってやる。俺が助けてやる。だから、俺をその森に案内してくれるか？」

強制はしない。危険を伴うから。

だが、現状で一番早い解決は、居場所が把握できる者を連れて自分が行くことだった。

まだ完治はしていないからだ。正直、黒狼に勝てるかと言われればわからない。だけど、子供を逃がすくらいならできる自信はあった。

子供といえど翼人だ。黒狼が届かない高さまで飛べばいいのだ。

「俺、行くよ！ だって、俺はルルの兄貴だもん！」

「よく言ったな、じゃあお前のことは俺が守ってやる」

「でもミクロは飛べないよね？」

「大丈夫、本気で走ればお前らより早いさ」

そして未来路は指示を出す。

リユーイは自分と一緒に森へ向かう。そして、それ以外の子供たちは大人へ助けを求めに行くようにと。

子供たちが頷き、助けを求めに行くと。

未来路はリユーイを抱いて、走り出す。

「いいか、妹を見つけたらとにかく高く飛ぶんだ。そうすれば、黒狼から逃げられる。そうしたら俺は放って置いて街へ逃げろ、いいな？」

「でも、それだと」

「妹を助けたいんだろ？ とりあえず、俺の言うことを聞いておけって」

「……うん」

未来路はリユイーの指差す方向に向けて、一直線に走る。

途中、家や建物があるが、そんなのお構いなく、飛んで屋根を蹴って、とにかく早く着くことだけを考えて走り出す。

「凄い……父ちゃんよりも速い……」

驚いているリユイーの声は聞こえなかった。

そして、あっという間に街を飛び出して、森へ向かう未来路だった。

「ミクロ、調子はどうだ？」

魔王リオーネが未来路の部屋に顔を出すと、部屋は無人だった。

「いない？ 珍しいな……ずっと引きこもっていたのに、トイレか？ 風呂か？」

そう思って家中を探すが、未来路が家の中のどこにもいないことがわかっただけだった。

「ど、どうして、いないのだ。庭か？」

慌てて庭に出ると、丁度未来路の部屋の下の辺りに足跡があった。リオーネはまさか、と思う。

嫌な予感がしてならなかった。

考えてみれば、一人で色々と考えたいこともあるだろうと一人の時間を作ってみたが、目を覚ましてすぐに殺してくれと未来路は言ったのだ。

そのことを思い出して、ゾツとしてしまう。
今でもその考えを捨てていなかったら？

「魔王様、なんだか街が騒がしいようです。なんでも、子供が森へ行ってしまったと、今、帝国軍も探索隊に加え向かわせました。あの……魔王様？」

「ミクロが……」

「はい、ミクロ様が？」

どうしたんですか？

と、尋ねるメイドにリオーネは青い顔をして呟く。

「……自暴自棄になってどこかへ行ってしまった」

「そうなんですか……って、ええええっ？」

まさか子供を助けに森へ向かっているとは夢にも思わない魔王とメイドは、未来路の探索隊も編成すべきか本気で考えるのだった。

4 「勇者の仲間」(後書き)

ストラトスたちはカーティアを仲間に帝国へ向かいます。
サンディアル王国では、聖女ではなく、国王に視点を当ててみました。

元勇者は子供たちと交流します。
そして魔王は勘違いを。

少しですが、ストラトスたちが大人しく国へ帰ったりした理由などを、文章内で補足を入れさせていただきました。

ストックが終わってしまったので、これからが本番という形で頑張らせていただきます。

ご意見、ご感想、ご評価いただけると、とても嬉しいです。どうぞよろしくお願いします！

5 「勇者でなくても」(前書き)

現在、日間、週間共にBEST5に入っております！
読んでくださり評価をしてくださる皆様のおかげです。本当にどう
もありがとうございます！

大陸北部にある「帝国」の首都であるイスルギから徒歩で十分も
しない場所に、その森はあった。

北部は冬が長く、秋の終わりには雪が降り始める。

それゆえに、森は大事だった。果実や薬草が実り、雪が積もる前
に森に負担を与えない程度に森から恵みを与えてもらう。

そんなサイクルを繰り返していた。

しかし、果実や薬草を求めるのはそこに住まう人だけではない。
動物も魔物もそれを求めてやってくる。時に、魔物は果実や薬草を
取りに来た者や動物を捕食するために、森の中でじっと息を殺して
いることがある。

そして、帝国から一番近い森でも最近から黒狼の目撃や被害が相
次いでいた。

普段であれば、軍が討伐隊を編成し、退治するのだが……まだ連
合との戦から一ヶ月も経っていないのだ。そこまでの人員が割けて
いないのだ。

グルルツ、グルルルツ

呻るような黒狼の声を聞きながら、翼人の子供ルルは怯えてその
場に座り込む。

戦で怪我を負って帰ってきた父親のために、薬草を用意してあげ
たかったのだ。本当なら薬を買ってあげたかったが、ルルのように
幼い少女にそんな金を持っているはずもなく、迷ったあげく森へ薬

草を積みに行くことにしたのだ。

だが、ルルは知らなかった。その森に黒狼がいることを。そして今、目の前には黒狼が三匹いる。

仲間ではないのだろう、互いにけん制するように誰が獲物であるルルを食らうのか睨み合っている。

(逃げなくちゃ!)

薬草を握る手を、ギュツと握り締めて、動こうとしてできなかった。

腰が抜けていたのだ。だが、無理もない。黒狼が恐ろしいのだ。しかも、目の前の三匹はそれぞれ体長五メートル近い。

きつとルルのような幼い少女など一口だろう。

「たすけて」

少女の呟きに、三匹がいつせいにルルを睨む。

「……ヒッ」

恐怖に身をすくませるルルに、一步、また一步と黒狼が近づいてくる。

そして、もう駄目だと、恐怖が最大限になったとき兄の声が聞こえた気がした。

「ルルー!」

「おにいちゃん?」

声の方に必死で首を動かすと、ものすごい速さで走ってくる一人の青年に抱きかかえられて、兄のリューイがやってきてくれている。

「おにいちゃん！」

「ルル！ 待つてるよ！ 今行くから！」

リユイーの声を聞いて、さらに速度を上げる未来路。

黒狼が獲物を取られると思ったのか、それと新しい獲物がやってきたと思ったのか、呻り声を上げて未来路たちを睨むが……。

「とりあえず、先手必勝！」

ドン、と地面を蹴って跳躍すると、一番近くにいた黒狼を蹴り飛ばす。

「リユイー、妹を連れて上へ飛べ！ できるだけ高くだぞ！」

「うん！」

リユイーは未来路の腕の中から飛び出すと、妹を掴んで空へ向かって飛び上がる。

しかし、残る二匹の黒狼がそれをじっと待つてくれるはずもなく、その体格からは信じられない俊敏な動きで跳躍し鋭い牙がならんだ大きな口を開ける。

だが、その牙は子供たちに届くことはなかった。

「なにやってんだよ、俺の相手をしてくれよ？」

二匹の片足を、未来路が両腕で掴んでいるのだ。

そして、その腕を思い切り引いて、後方へ投げ飛ばす。

「やっべ……傷口が開いたかも」

腕や腹、背中がズキズキと痛む。

しかし、だからと言ってもう限界ですというわけにはいかないのだ。

「でも、少しだけ嬉しいって思うよな。俺にもまだ、誰かを守りたいって気持ちがあるんだ……まだ誰かのために戦える力があるんだよな」

裏切られて、絶望して、死にたいと思った。本当に、死んで消えてしまいたいと思った。

だけど、そんな自分だけど、もう勇者でないけれど、さつき出会ったばかりの子供たちのために、戦えることが嬉しいと思った。

「とりあえず、今はそれだけでいいや。あまり難しいこと考える頭もないし」

未来路は笑みを浮かべる。

そして、立ち上がる三匹の黒狼を見据えて、拳を握るのだ。

桜井未来路は勇者としてこちらの世界へ召喚された。だが、召喚されたからといって、特別な力を授けられたわけではない。

勇者召喚魔術は勇者となりえるもの、勇者の資格があるものを呼び出すというシンプルな召喚術なのだ。

つまり、地球では意味のなく、生涯気がつくこともなかったであろう力が未来路にはあったのだ。それゆえに、こちらの世界に召喚されてしまった。

ぐるるるる

「黒狼が呻り声を上げる。

蹴りと腕だけで、自らの巨体をぶっ飛ばした未来路に黒狼は警戒

しているのだ。

そして、痺れを切らしたのか一匹が地面を蹴って突っ込んでくる。そして、鎧をも切り裂く爪で切り裂こうとする。

しかし、それも未来路には通用しなかった。

爪が届けば未来路も大怪我を負っただろう。だが、前足の足首を掴み受け止めたのだ。片手で。

五メートルもある体格を考えれば体重も凄いはずだ。だが、全てではないとはいえ、片手でその重みも受け止めているのだ。

未来路には膨大な魔力があった。しかし、その魔力を魔術として使用するには才能がなかった。初歩的な魔術、医療魔術などは使えるが、それでも才能は無いに等しい。

そこで、師であるシェイナリウス・ウォーカーはその膨大な魔力を臂力に変換するようにと言った。

そして、思い出さなくもないほどのしごきを受けて、魔力を臂力に変換することに成功したのだ。同時に、魔力を何かに込めることもできるようになった。

ゆえに、走れば獣のように早く、蹴りや拳は黒狼の巨体もぶっ飛ばす。シンプルゆえに強い力を得たのだ。

「二人は……だいぶ離れたな。これなら大丈夫だろ」

後ろを振り返ると、兄弟は未来路の言いつけ通りに街へ向かっている。もう森からも出ているし、黒狼も追いかけるはしないだろう。

ホッとした瞬間、残りの二体が牙を、爪を、未来路に向けて襲い掛かってきた。

爪は同様に受け止めたが、牙は体から腿にかけてを思い切り噛み付かれた。魔力を臂力に変換していなければ、きつと抉られていただろ。

「っーかさ、お前ら……獣のくせに、どっちが本当に強いのか本能

でわからねえのかよ？」

鋭い牙に噛み付かれているというのに、激痛でのた打ち回りたい気持ちもあった。

同時に、できるだけ黒狼を傷つけずにこの場を収めたいという気持ちが強かった。

そして……両腕で掴んでいる二匹の前足から力が抜けて、噛み付いていた黒狼も顎の力を緩めた。

変わりに、体から血が流れて出てくるが、あまりそのことが気にならなかった。どうしてだろうか、と思ったのと同時に、ふらりと体が傾き倒れてしまう。

正直まずいと思った。だけど、助けたい子供は助けられることができなし、もう良いかなとも思ってしまった。

しかし、未来路は驚くことになる。てつきり襲い掛かってくると思った黒狼が心配そうに、鼻をこすりつけてくるのだ。癒そうとしているのか、体の傷口も舐めてくる。

「驚いたな……黒狼を屈服させたのか？」

それは聞いたことのある声だった。

確か、魔王と一緒に死に掛けたとき、メイドと一緒にやってきた……

そこまで思い出すと、未来路は眠るように意識を手放したのだった。

「本当に心配したんだぞ。君は一体、何を考えているんだ？
日常生活は問題なく送れるだろうとは行ったが、戦闘行為はもちろ
ん、魔力を使った全力疾走などをしたら傷口が開くのは当たり前だ。
いや、それは良いとしても黒狼に噛まれるだなんて、君は本当にま
だ生きていたくないのかい？」

夜、目を覚ました未来路は、ベッドの隣にある椅子に腰か掛けて
いた魔王リオーネに説教を食らった。

「無事だったから良いとしても、あれは一体どうするつもりだい？」
「……あれってなに？」

「黒狼だよ、君が屈服させたんだろう。三匹も着いて来てしまって、
今は庭にいるよ。幸い、街の者を襲うつもりはないようだからいい
けれど、ご近所は皆怖がってしまったているではないか、まったく…
…呆れるを通り越して驚愕だよ」

人間が黒狼を屈服させたなど、前代未聞だと彼女は言う。

とはいえ、未来路としてはそんなつもりはなかった。

ただ、少し戦ってみて、勝てると思ったのだ。だからこそ、命を
奪うよりも、相手がそれに気付いて退いてくれればと思ったのだが
……まさか街まで着いてくるとは思わなかった。

「ま、まあそれは置いておくとして、子供は無事か？ えっと、リ
ューイとルルだったな、名前は」

「ああ、あの子供たちなら無事だ。逃げている途中、捜索隊に保護
されて、そのまま街へと無事に戻った。君の事を心配していたよ、
見舞いにも来たんだが……黒狼に怖がって逃げてしまったよ」

苦笑いを浮かべてみせるリオネ。

「あー」

まあ確かに黒狼が三匹もいたら、そりゃあ逃げるだろうなと思う未来路だった。

しかし、疑問は残る。

「俺は別に屈服させたつもりはないんだけどな……」

「魔物は基本的に本能に忠実だ。そして、黒狼は本能に忠実であっても愚かではない、どちらかといえば賢い魔物だ。それゆえに敵対すると面倒であり、脅威なのだが……きっと君に勝てないと本能で理解して、君が黒狼を傷つけるつもりがないとも理解したのだろう。ゆえに、君に下つたのだ」

「じゃあ俺があの良い感じの毛並みを撫でまくろうが、自由と？」

「……気になるのはそこでもいいのか？　だが、嫌がらない程度であれば問題ないだろうね。ただし、あの黒狼たちが何か問題を起したら君の責任になるよ。それだけはしっかりと覚えておいて欲しい。一応、ドワーフ族が魔物と意思疎通をできる道具を造ってみると言っていたから期待していいとは思うよ。彼等の技術は凄いからね」

わかった、と未来路は頷く。

「しかし、本当に驚き心配したよ。てっきり、私は君が自暴自棄になつてしまい、どこかへフラフラと行つてしまつたんだと思つたんだ。つい、捜索隊を編成してしまつたよ」

「いや、それは悪いと思つてるよ」

さりげなく信用されていないな、と思うがそれはあえて口にはだ

さない。

立場が逆なら同じようなことを思うだろうから。

「結局、杞憂に終わったからそれは良いんだ。だが、まさか黒狼と戦っているとは思わなかったね。まあ、戦いというほどではなかっただろうけど、大怪我を負ったのは間違いない。医療魔術も完全じゃない。しばらくは安静にしているといい」

「わかった。悪いな、色々と面倒掛けて」

「構わない。君は覚えているか分からないけれど、一度君に命を救われているからね。それよりも、黒騎士に礼を言っておくといいよ。黒騎士が君を発見して、君を守ろうとする黒狼からなんとか街へと連れてきてくれたのだから」

そういえば、最後に黒騎士を見たなと思い出す。

男なのか女なのか分からない中性的な声だった。鎧と兜で体つきも、顔も見えないので性別も分からない。

それに、まともに顔を合わせたこともなかったなと思う。

「……傷が癒えてこの国を出て行く時までには礼を言っよ」

未来路がそう呟いた瞬間、椅子を蹴倒すようにしてリオーネが立ち上がる。

そして、震える声で、恐る恐る尋ねてくる。

「君は、帝国から出て行くつもりなのかい？」

「一応、そのつもりだけど……いつまでも迷惑は掛けられないし、問題あるか？」

「いや、問題はない……だが、私は迷惑だと思っていない、それに行けば出て行って欲しくないと私は思っている」

それが分からない。

リオーネは良くしてくれている。

敵対していたというのに、死に掛けていたのだから放っておけば良いのに、それがどうしてだか未来路にはわからなかった。

「アンタは初代魔王のことがあるから俺を助けたんじゃないのか？」

「それは理由の一つだ。私は言ったはずだ。君の故郷の話聞かせて欲しい、君のことを知りたい、私のことを知って欲しいと」

「ああ」

「ただの興味や酔狂だけでそんなことを言ったわけじゃないんだよ」

「じゃあ何だよ？」

君と私で帝国を、いや世界を少しでも良いものにならしたいと思っ
っているんだ。

一瞬、未来路はリオーネの言葉にあっけにと取られてしまう。

まさかそんなことを言われるとは、夢にも思っていなかった。

だからこそ、返事に困る。

「以前、君に言ったが覚えているだろうか？ 君みたいな勇者とは始めて出会ったんだ。私は君との出会いに運命のようなものを感じたよ」

「……………」

「私はね、別に人間をどうこうしたいだなんて微塵も思っていない。ただ願うのは、我ら異種族の平穏。そして可能であれば人間と異種族の友好関係の成立」

それは……正直難しいだろうと思う。

だが魔王は笑ってみせる。

「うん、確かに難しいことを言っているのは承知している。正直、何をどうすればそこへ至れるのか検討もついでいない。けどね、人間と異種族が互いに手を取り合って平和に暮らしていた時代もあったんだよ」

「え？」

まさか、と思った。

今まで、たった一年だが、旅をして来て異種族に嫌悪感を持たない人間にはあったことはあるが、互いに手を取り合って生活していた者などみたことはない。

いや、エルフという異種族と自分は、ストラトスやキア、そしてカーティアたちも上手くはやっていた。

だが、手を取り合った平和な時代があったと言われても、たった一年しかこちらの世界にいない未来路でも何かの間違いではないかと思ってしまう。

それほど異種族と人間の溝は深いのだ。

「正直、驚くのは無理もないね。だが、本当にそんな平和な時代があったんだよ。ただ、残念なことに、どうしてその平和な時代が終わり今のように人間と異種族に大きな溝ができてしまったのかは私もわからない」

だからこそ、と彼女は言う。

「私と一緒に、少しでも世界が平和になるように、手伝ってくれないか？」

「俺が、か？」

「そうだ。君でないと駄目だ。君のように、人間であり、異種族に偏見を持たない君のような人間だからこそ、共に歩みたいと思う」

それは魔王リオネ・シユメールの嘘偽りのない言葉だった。

だが、その言葉に未来路はすぐに返事ができない。

確かに、平和になれば良いと思う。翼人、獣人、鬼族、人間の子供たちが一緒に遊んでいたように、種族など気にせず手を取り合えたらきつとこの世界は素晴らしいものになるのではないかとも思う。

しかし、自分に何ができる？

裏切られて、抜け殻になっていて、少しだけまだ守りたいという気持ちはある。まだ戦えるということもわかった。だが、それだけの自分に一体何ができるのだろうか？

「答えを今、聞くつもりはないよ。むしろ、君が今とても一生懸命に考えてくれていることは伝わったから、それだけで私は嬉しい」

「……ごめん」

「謝る必要なんてない。私のわがままなんだ。でも、やっぱりこのままじゃいけないと思ってしまっからね」

自分は全然、この世界のことを、異種族と人間とのことを知らなかったと未来路は後に思う。

人間が異種族を嫌っていること、迫害していることは知っている。だが、その理由は？

その結果、異種族は何をされた？

異種族だけではない、人間だって身分の差があり、酷い者は家畜以下の扱いを受けるといふ。それはどんな扱いなのだ？

未来路は何も知らない。

そもそも、勇者として魔王を倒そうとした、本当の理由は？

「俺は……」

「病み上がりの君に、色々と言うべきでは無かったかな？ 少し焦っていたかもしれない。でもね、私は君となら、何か一つでも後で

振り返って「ああ、やってよかった」と思えることができる気がするんだ」

「どうして、そう思う？」

「う……そう問われると難しいんだが、二日間君と戦って、君と一緒に死にかけて、まだ出会って間もないけれど色々な経験を一緒にした。そして、さっきも言ったけど、君は今までの勇者とは違う。だから、そう希望を感じるんだ。そして、その希望と共に私は何かをしたいと思っている」

こういうことは上手く言えないし、伝えづらいねとリオーネは苦笑する。

「とにかく、少しだけ考えてみて欲しい。もちろん、断つても帝国から追い出そうとはしない。それは約束する。では、私はこれで失礼するね」

そう言ってリオーネは部屋から出て行ってしまふ。

体が痛む。心が痛む。疲労していると体が悲鳴を上げていて、目を瞑れば眠ってしまいそうなほど疲れているのに……なんだか今夜は眠れない気がした。

5 「勇者でなくても」(後書き)

今回は元勇者をメインにさせて頂きました！

迷いながら、一歩ずつ。そして、また迷う。しばらくそんな感じが続きそうです。

次回は仲間のお話です！

ご意見、ご感想、ご評価をして頂けるととても嬉しいです！ どうぞよろしくお願いします！

6 「アルテとサンラ」(前書き)

総合評価が11000ptを超え、お気に入り件数も4000件を超えました！

本当に嬉しいです。読んでくださる皆さんに心からお礼を申し上げます。ありがとうございます！

ストラトス・アディールは、キア・スリーズ、カーティア・ドレステンと共に「帝国」に向けて大陸北部を歩いていた。

「もうすぐ初夏だっていうのに、結構涼しいっすね」

赤髪をカチューシャで後ろに流している少年ストラトスは、前回来た時には感じることでできなかった北部の涼しさを感じていた。

コートを着ていて良かったと思いつつ、いつ魔物に襲われても対応できるように、背負っている剣にはいつでも手を伸ばせるように気を抜いてはいない。

前回、北部に来た時は魔王を倒すために、戦いに戦いとそんなことを気にしていられなかった。

「北部は長いからな。秋になれば雪が降り出し、冬になれば天然の要塞と言えるほど雪に覆われる。異種族が北部に国を構えるのは良い考えだと思う。現在、異種族が暮らしているおかげ北部は開拓されているが、これが人間であつたなら北部での生活はままならず未開の土地になっていただろう」

だが、そのことを人間の多くは考えていない。理解していない。理解している者も見えて見ぬふりをしている。それが現状なのだ。

金髪を顎の辺りで切りそろえている凛と整った容姿に、修道服と剣帯というアンバランスな格好の女性、カーティアが説明をしてくれるが、その顔は若干苦い。

「カーティア様？」

不思議そうに尋ねる、灰色の髪にローブを着込んだキア。

それに、いや……と首を振ると、彼女は言う。

「私が所属していた月の女神アルテを信仰する教会は、異種族のことを悪とは見なしていなかった」

「え？」

「まあ、驚くのは無理はない。と、言っても、このご時勢だ。悪ではないとしても、共に手を取りというのは難しいと考えていたがな……」

ここで少し神について話そう。

かつて世界を創り、人間を生み出したという神がいた。名をアルテとサンラという姉妹の女神だったという。

二人はその後、様々なものを創り、生み出す。

異種族もそうである。

女神アルテは自らを月へ姿を変え、その時にあふれ出した力で多くの異種族を生み出したという。女神サンラは自らを太陽に姿を変え、その時にあふれ出した力で人間に力を与えたという。

あくまでも神話の話である。だが、その神話が正しければ、人間も異種族も同じ神によって作り出されたことになるのだ。

ゆえに、月の女神アルテを信仰する者は、異種族に対して嫌悪感を抱かないし、迫害もしない。しかし、それだけである。現状では共に歩んでいこうというのは難しいと思っている。

また、太陽の女神サンラを信仰する者は、異種族と関わりのない

サンラを信仰するゆえに、異種族を嫌い、迫害する。また、王族や貴族に信仰者が多いのが特徴である。

「なるほどー。私はあまり宗教は興味なかったですけど、今の話はちょっと面白かったです」

「だけど、カーティア様は貴族なのにアルテの信仰者っすよね？」

ストラトスの問いにカーティアは頷く。

「私は宗教とは関わらない生活をしていたからな。だが、ミクロのために祈ろうと決めた時、奴が異種族との友好も考えていたことを覚えていたのでアルテ信仰の教会に籍を置いたのだ」

「そうだったんすか」

「ああ、それに……あまり言いたくはないが、サンラ信仰者のことはあまり好きではない」

隠そうとしない嫌悪感を浮かべてそんなことを言う、カーティアを見て、ストラトスとキーアは驚いたような顔をする。

何故なら、自分たちが知るカーティアが、嫌悪感を出すときなどは碌でもない者に対してが殆どである。

「どういうことなのか、聞いていいですかカーティア様？」

「うん、一応お前たちも知っておいた方が良さだろう。私も教会に所属してから知ったのだが、現在……大陸では太陽の女神サンラを信仰する者が多い。その一番の理由が異種族との溝などにある」

カーティアは説明を続ける。

アルテ信仰者も少なくはないが、決して多くはない。

教会という組織は一つであるが、中身はアルテ派とサンラ派という二つの派閥に分かれているのだ。同時に、異種族に対しての考え

方も。

そして今、アルテ派は教会の立場が危ういという。

サンラ派は王族や貴族が多こともあり、教会内での立場も不動のものであり、過激な者はアルテ派を異端だと言ったり、異種族を滅ぼそうという考えの者までいるという。

「うわー、それって最悪っ」

「そうだな、一方アルテ派の穏健な者の中には、異種族と手を取り合うことで世界がもつとよりよいものになるのではないかと思っ
ている者もいるんだ」

私はその方が良いと思う、とカーティアは言う。

これはあまり知られていないことであるが、アルテ派の教会では追われた異種族を匿ったり、人間でありながら人間扱いされない者を北部へ逃がすということも秘密裏に行っている。

そして……これは決してサンラ派には知られてはいけないことではなるが、アルテ派は「帝国」とパイプを持っている。今まで、匿い保護した異種族や、帝国に保護された人間から帝国とパイプをつないだのだ。

「そうっすね。せつかくなんだから仲良くできれば良いっすよね。

俺たちだって、さんざンシェイナリウス様やレインさんに助けてもらっ
つたし」

ストラトスの言葉にカーティアとキーアも頷く。

「あれ？ でも、だったらどうして俺たちは「魔王」を倒すために「帝国」と戦ったんだ？」

「起きているか、ミクロ？」

黒狼と戦って数日、桜井未来路の傷は大分癒えていた。医療魔術を受けたということもあるが、未来路自身が、魔力を循環させて自身の回復能力を上げていたおかげもある。

「起きてるよ」

パンツにシャツというラフな格好に、寝起きのせいだろうボサボサの黒髪。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

「食事ができている、起きているなら一緒に食べよう」

「ああ、ありがとう」

わざわざ朝食の誘いに来てくれたのかと、思い礼を言う未来路にリオーネは苦笑する。

「食事はみんなで取った方が美味しいだろう？」

「……そうだな」

笑みを浮かべてそんなことを言うリオーネに、ふうと未来路は大きく息を吐く。

ここ数日で思ったことだが、魔王と言われているリオーネであるが、その普段の姿はどこにでも居そうな女性である。

服装や外見が、ではない。当たり前前に笑い、当たり前前に怒り、当たり前前に心配したり、機嫌を悪くすることもある。

先日は夢のような話を語ってみせた。それに、自分が必要だという。

俺が知っていた「魔王」とは違う。

未来路は馬鹿ではない。

こちらの世界に召喚され、勇者だと告げられて、戦うように頼まれた。実際は、頼まれたというよりも……自分にできる選択は魔王と戦う以外はなかった。

だが、それでも、自分なりの理由が必要だった。そして未来路には理由ができた。

異種族の脅威、人間との長きにわたる戦の繰り返し、戦によって孤児が増え、泣く者もいることを知った。

戦を終わらせたいと心から思った。できれば、戦うのではなく、人間だろうと異種族だろうと関係なく手と手を取り合えば良いと思った。

魔王と戦わなければいけないが、それでも戦って殺すつもりはない。殺されるつもりもない。戦うというきっかけでも、そこからなんとかしてでも人間の中にも異種族と分かり合いたいと思っている奴がいるってことを知って欲しかった。

だけど、それは人間側から見ただけの理由だったことがわかった。聖女に裏切られ、自分のことを助けてくれたのは異種族であった。いや、その頂点に立つ「魔王」だった。仲間だと思っていた聖女は自分を道具だと言った。

なるほど、と思う。今なら思える。

俺は道具だ。俺は道具だった。

心からそう思える。

恨まないとは言えないけれど、正直恨んでいるし、憎んでもいる。目の前に現れたら感情が制御できないことは間違いないだろう。

だが、自分のことを道具だと言ったことだけは間違っていないと思う。

未来路自身、この数日「帝国」で暮らすことで、ごく一部の住人とだが触れ合った。

異種族は確かに生まれながらに人間とは違う。人間を上回っているかもしれない。だけど、感情がある、家族がいる、誰かのために何かをしたいと思う気持ちも持っている。

それが人間とどう違うのか？

それを感じてしまった瞬間、自分の一年が無駄だったのではなかったかと思ってしまった。

もちろん、ストラトスたちに出会ったことは無駄ではないし、それ以外にも多くの人と出会った。それを無駄だとは言わない。いや、絶対に無駄ではない。

だが、結局のところ、所詮自分はサンディアル王国に、連合に、そしてアンナ・サンディアルによって都合良く動いていた道具だったのだと思った。

「どうした、未来路？」

「いや……なんでもない」

「……そんな顔はしていないぞ。自分のことを責めているように見える。君は時々、そんな顔をしているよ」

勝てないな、と思う。

観察力がではない。遠慮なく平気で物事を言ってくる。だが、それが不快ではないと思うのが不思議だ。

「ただ、俺は本当に道具だったんだなと思ったただだよ」

リオーネは一瞬、何か言おうとしたが、未来路は何も言わないでくれと懇願するような顔で首を横に振るった。

それが通じたのか、リオーネは何か言いたそうな顔をして、しかし何も言わないでくれた。

「悪い、朝から嫌な思いをさせたなよな。でも……いや、なんでもない」

会話をしないまま、階段を下りて二人は朝食が用意されている食堂へと向かう。

近づく和良好的匂いがして、本当に種族の違いだなんて些細なことだと思う。

「……食べるものだって変わりはないしね」

食堂に入り、テーブルを見て並んでいる朝食を見て、未来路は呟いた。

「ミクロ」

名を呼ばれ、視線をリオーネに向ける。

彼女は笑みを浮かべていた。

朝から不快な話をされたと気を悪くしているわけでもなく、何かを察してくれているような優しい笑みだった。

「ゆっくりで良い、いつか誰かに話したくなったら、今の気持ちを話してくれ。それが私だったら嬉しい。だけど、私だと話しづらかったらメイドや黒騎士など他にも相手はある。ただ考えているのだから息が詰まってしまうよ、それにその考えが間違っているのか、

考え過ぎなのか、それとも正しいのか……他の誰かに意見を求めるのも大切だと、私は思うよ」

「……リオーネ」

「と、偉そうなことを言っても、私もいつも考えて間違っただの繰り返しだ。私たちは生きているんだ、一度間違えたくらいで全てが終わるわけではないよ。何度でもやり直せることができる」

同時に、生きている者の義務だね、と彼女は言う。
なるほど、と思った。

少しだけ、ほんの少しだけ気が楽になる。

「ありがと、な」

「うん、そう言ってもらえると嬉しいね。じゃあ、朝食にしよう」

「ああ」

ほとんど食欲なんてない毎日だった。良い匂いがしても、どうしても食べる気がしなくて。

だけど、今日は少しだけいつもよりも食べることができた。

サンディアル王国の図書室に一人の女性がいた。

彼女の名は、セリアーナ・サンディアル。サンディアル王国国王の娘であり、アンナ・サンディアルの姉でもある。

王位継承権代一位であるが、現在はそれも危うい。とはいえ、本人は王位などには興味がないのだ。

そんなセリアーナは読んでいた本を閉じると、ふうと溜息を吐く。

考えるのは妹のことだった。

妹のアンナとは血の繋がりが半分しかない。自分の母親は貴族の出身であり、アンナの母親は貴族ではないが大きな商家の娘であった。

母親同士が仲が、という話はなかった。そのような話以前に、アンナの母は死んでしまったから。

どうして死んでしまったのか、それを自分やアンナには知らされていない。知るべきではないと、父に言われてしまったからだ。

自分の母は、アンナのこととも自分の娘のように育てた。実際、アンナは母にも自分にも良く懐いてくれて、可愛らしい妹であったし、好きだった。

「だけど、二年位前から変わってしまったのよね……」

変化が起きたのは二年前だった。

最初に、笑顔が嘘くさくなった。周囲の人間はわからなかったよ。うだが、ずっと一緒に育っていた自分にはその変化がわかった。

次に、自分を見る目が変わった。冷めていて、見下していて、時折嫌悪も混ざるようになった。自分が妹に嫌われるようなことをしてしまったのだろうか、と思い妹と話をしたが、妹の口から出てくる言葉は異種族のことをどう思うかという問いであった。

自分と妹のことに異種族は関係ないだろうと思ったが、気になるのなら答えようと思い、正直に話した。

異種族に関しては前々から、妹と話をしていたし、そう隠すものではないと思っていたから。

いつか、手を取り合える日が来れば良いと思っているわ。

そう言った自分に、妹は嫌悪と憎悪が混ざったような視線をぶつけてきた。

他の者にそうされるのなら分かる。しかし、妹がそれをするのは心底驚いてしまった。

何故なら　アンナも異種族と人間の溝を埋めたいと願っていたから。

エルフという異種族と友好関係を結んでいたサンディアル王国だからこそ、他の国とは違い柔軟な考えができていたのだ。

では、二年前にアンナに一体何があったのだろうか？

セリアー又は調べた。自身で、信頼できる者にも手伝ってもらい。しかし、分からなかった。

そして、一年後、アンナが誰もが無理だと思っていた勇者召喚魔術を成功させ、異世界から勇者の素質を持つ少年を召喚することに成功した。

セリアーも何度か会い、会話もしたが、好感の持てる少年だったことを覚えている。

異種族についての話もした。可能なら、手を取って互いに歩み寄ればという話にも興味を持ってくれた。そして、妹のことをよくお願いします、と頼んだのだった。

そして、妹は帰ってきた。

聖女と呼ばれ、英雄と呼ばれ、しかし彼は帰ってこなかった。

妹からの話で、魔王と共に死んだと聞かされ、セリアー又は泣いた。異世界からこちらの都合で呼んでしまった少年が、元に戻ることができずに命を落としてしまったのだ。

これほど悲しいことはないだろうと思う。

だけど妹はずっと笑っている。微笑んでいる。少なくともセリアー又が知る限り、アンナが勇者の少年のことで悲しんでいることは一度もなかったといえる。

「あんな子ではなかったなのに……」

誰よりも優しい子だった。

旅を始めてすぐに聖女と呼ばれるようになった。それ以前から医療魔術を得意とするアンナは手当てをした者に聖女のようなと言われていたが、それが多くの者が口をそろえて言うようになった。

姉としては誇らしく、そして大げさな評価ではなるが、最愛の妹が聖女と呼ばれ民に好かれているのは心から嬉しかった。

そして、英雄となりアンナは王位を求め、エルフとの友好関係を破棄し、異種族の危険性を説いた。

多くの者が驚きを隠せなかった。セリアーヌでさえ同じだ。

だが、現在のアンナの言葉を真つ向から否定できる者もいなく、エルフとの友好関係を妬んでいた連合諸国はアンナの言葉を支持した。

「シェイナリウス様も、レイン様もあんなに優しく良い方だということに……一年も一緒に旅をしてきた仲間ではないの？」

セリアーヌ自身、シェイナリウスとレインとあったことがあり、言葉も交わした。

シェイナリウスはもともと人嫌いということもあったが、それでもただ闇雲に人間を嫌っているのではないと感じた。レインは礼儀正しく、短い間だったが友人とまで呼べなくても親しくなれた。

そんな二人がいるエルフがいずれ脅威になる？

そんな馬鹿な、と叫びだしたい気分だった。

その時、会議に出席できていればきつと大声で妹の意見に反対していただろう。ここまで好きにさせていなかっただろう。

今では国王である父も様子がおかしく、母もそんな父を心配しながら今後の国の行く末を案じている。

若き英雄たちがこの国から去ってしまったことも、父を悩ませている理由の一つだろう。

ストラトス・アデイル。キア・スリーズ。アーティア・ドレ
スデン。

勇者として召喚された少年、未来路の大事な仲間であり、アンナの仲間でもあったはずだ。

アンナは必死で保護対象として追っ手をだしているが、その追っ手も最近ではだんだんと手段を選ばなくなってきたと聞いている。

一体、どうして三人の英雄は国を去ったのか？

アンナに黙って行ってしまったのは何故か？

本当に、アンナになにがあったのか？ そして、今後この国はどうなるのだろうか？

心配事は尽きない。

「しかし、今私にできることは多くありません。ですが、私がそれを行うことで何かのきっかけになるということを信じています」

そう信じて、セリアー又は動き出す。

もしかすれば、妹と道を違えてしまいかもしれない。

それでもやらなければいけないのだ。

そして、セリアー又は数冊の本を持って図書室から出て行く。

彼女が持ち出した本は古い本であった。古今東西、様々な国の、それもすでに亡き国までもの召喚術が記載されていた本であった。

セリアーがこれから行うこと、それは「勇者召喚魔術」について調べるということだった。

6 「アルテとサンラ」(後書き)

最新話お届けしました。

申し訳ありませんが、現在私は風邪を引いて寝込んでいます。

なんとか更新できましたが、感想のお返事は回復するまでお待ち頂けると助かります。後にしっかりと返信させて頂きますのでご理解頂けると助かります。

ご意見、ご評価、ご感想等を頂けると嬉しいです。どうぞよろしく
お願いします！

7 「勇者の仲間北部にて」(前書き)

総合評価14000ptを超え、お気に入り件数も5500件を超え
えました。

これだけの評価を頂けたこと、本当に嬉しい限りです！
読んでくださる皆様に、本当に感謝しています！

暗闇の中で一人の人間が苦痛に耐えるように声を上げた。

「どうして、どうして誰も私を殺そうとしない！」

声で女性の声だとわかる。

蝋燭の明かりさえない暗闇の中で、かすかな月明かりに当てられて亜麻色の髪がかるうじてわかった。

「恨みで殺されようとしても、失ったものが大き過ぎたのか私に誰も刃を向けなかった。忌々しい異種族について国が不利になるように発言しても、反対する者がいても誰も私の命を狙わない……」

死を懇願するように女が唸る。

だが、女が死を願う理由は誰にもわからない。

「何をどうすれば私はこの体から解放される？」

暗闇の中、本人には見えているのだろう。自身の腕や体を忌々しく睨みつける様に眺めると、一つ舌打ちをする。

「中身もうるさく抵抗をしているし、そろそろこの体も私の器としては限界が訪れようとしている。この器が限界を超えて崩壊するようになれば、私も共に死んでしまう。それでは意味がない！ 賭けをしてまでこちらの世界へとやってきたというのに、ただ器が崩壊するというつまらない結末で私は終わりたくはない」

おのれ……と怨嗟を込めた声を上げる。

「アルテサンラ……貴様が、貴様さえいなければ……私がこの様な惨めな思いをすることはなかったのだっ！」

爪を腕に突き立てて、血が出るのも構わず腕を引っかいていく。ポタポタと両腕から血が流れ、床に血の水溜りが広がっていく。

「聞こえる、聞こえるぞ……鬱陶しいほどに痛い痛いと言き叫ぶお前の声が！ お前の悲鳴が私を少しだけ癒してくれる。普段は鬱陶しい懇願の声も聞いていて心地が良いときもあるが、やはり人間は泣き叫ぶべきだ！ そして呪え、世界を、アルテサンラを、憎め、憎悪しろ！」

笑う、嗤う、晒う。

闇の中で、口が裂けてしまうほどに笑う。

「これは復讐だ、アルテサンラよ！ お前の子と、私の子、どちらがこの大陸に相応しいか、そしてどちらがこの世界の神に相応しいか、永久の決着を着けようではないか……」

自らの血でできた水溜りを手を入れて、その血をすくう。

そして、数歩離れて女は魔法陣を書き出した。

この大陸では見たこともない陣である。

「
」

どう発音したのかわからない。

だが、この場に考古学の権威が居れば、かろうじて理解ができたかもしれない。

女が発音した単語は、はるか昔に使われていた失われた言葉であったということに。

ストラトス・アデイルと、キア・スリーズ、カーティア・ドレステンが大陸北部に入って一週間が経った。

「本当に、北部は魔物の数が半端ないっすね……一週間で何度戦ったことやら」

炎を連想させる赤髪をカチューシャで後ろで流した小柄な少年、ストラトスは剣を鞘に収めると、いい加減にして欲しいとため息交じりに呟く。

そう、たった今、一つの戦闘が終わったばかりであった。

「しかし、いくらグールとはいえ、元連合軍の兵士を殺さなければいけないというのは気分が悪いな」

ストラトス同様に剣を鞘に収めカーティアが呟く。

息を切らしているストラトスに対して、カーティアはまだ余裕があることがわかる。息も切れていないし、凜とした容姿には汗一つ浮いていない。

彼女は乱れた金髪をそろえると、戦闘によって付いてしまった土を修道服から払う。

「私は、もう……限界かも……」

そう息も絶え絶えに呟くのはキア。灰色の髪とローブを纏い、魔術師ならではの杖を持っている。もつとも、その杖も今ではキア自身を支える道具となってしまうているが。

「そうだな、さすがにここで休憩はできないし、もう少し歩いたら休憩を取ろう」

「はい！」

「はい」

カーティアの言葉に、ストラトスとキアが返事をする。

声だけ聞いても疲れているのは良くわかる。だが、それも無理もないだろうと思う。

相手はグールだった。この一週間ほとんどの相手がグールだ。グールとは死体に寄生虫のような魔物が宿り、食べ物を探してさ迷うものである。

しかし、性質の悪さでは、このグールは嫌悪すら抱くことができる。

グールは魔物である寄生虫を指す。そして、グールはいつも餓えているのだ。ゆえに食事を欲する。では、グールは何を食べるのかというと、肉だ。それも鮮度が高いほどグールは好む。

最初に、グールは死体に寄生する。そして、脳を食らい、そこから侵食して肉体を得る。死体を自らの肉体としたグールはその肉体を使い肉を求めめるのだ。そして、もつとも彼等が好む肉は 人間の肉である。

それゆえに、カーティアたちは何度も襲われることとなる。

連合軍が死体の処理を怠ったために、グールにとつての器がたくさん残されていた。グールは死体でなければ寄生できないという弱点を持つ。もう一つの弱点は、一度寄生して肉体を手に入れば、人間と同様に殺せるということである。

だが、考えてみて欲しい。

死に、腐った肉体だけでも十分に目を背けたくなってしまう相手であるというのに、それが知り合いであつたら？ そうでなくても、かつて共に戦つた兵士たちであつたら？

「気分が悪くなるのは当然だな。私はグール討伐は初めてではないし、今更だが……それでも辛いと感じることはある」

ゆえに彼女は祈るように黙祷する。

グールに乗つ取られた死者の魂に安らぎを、と。

教会へ所属して日が浅いカーティアであつたが、それでも祈らずにはいられなかった。

そして、三人がしばらく歩くと、小さな川を見つけることができた。足場も悪くなく、ここなら一晩過ごすことも可能だと判断した三人は一晩の休憩を取ることにした。

「じゃあ、俺は魚釣ります！」

と、張り切つて竿を持つて川に向かつたストラトス。

実は、釣りというものは未来路から教わつたものであつた。精神集中ができて、楽しむこともできる、そして食事も確保できるならいいだろう、と竹で作つた釣竿をストラトスにくれたのだ。

それからストラトスは兄貴としたう未来路と一緒に釣りをするのが好きだつた。

数で勝負したり、ストラトスの方が大きな魚を釣つたりすると未来路が悔しがつたりと、今でも鮮明に思い出すことができる。

カーティアやカーアから見ても、二人は兄弟のようだつた。

「さて、カーアは……もう寝ているか。とはいえ、無理もない」

この一週間、体力が完全に回復しないうちに次の戦いが待っていた。そしてグールに有効なのが魔術である。炎で焼き払うのが一番なのだ。同時に、付加魔術でストラトスの剣に炎を纏わせたりと、キアアの役目は大きかった。

それゆえに、一番の疲労が彼女を襲っているのだ。

そもそも、この三人の中で一番体力が無いのは誰だと問われたら、キアア自身も自分だというだろう。

実際、そうなのだ。

キアアは魔術師としての才能は誰もが羨ましがらるほどある。だが、駆け出しもいとこだ。いずれは体力もつけて、高位魔法を使いながら戦場を駆け巡れるようになるまでの実力をつけたいと思っている。

だが、まだ十台半ばの少女にはそれも辛いだろう。

カーティアは彼女が少しでも休めることを願いつつ、バックから取り出した毛布をキアアに掛ける。

そして、自身は途中拾ってきた枝と乾いた草に火をつけて湯を沸かす。

「では、私は二人のために少しでも体力のつく料理を作るとしよう」

カーティアは現在持っている食材を確認して、シチューを作ることに決めたのだった。

辺りはすっかり薄暗くなっていて、三人は火を囲んで川の近くで食事を取っていた。

グツスリと寝ていたキーアも食事ができるにつれて、臭いに反応したのかムクリと起きてきたので、起こすまでもなかった。

今晚のメニューは、カーティアが作った野菜と干し肉のシチューに、ストラトスが釣ってきた鱒の塩焼きが三匹。

「美味しい、美味しいすよ！」

「もっとゆっくり食べなよ、ストラトス」

ガツガツとシチューを食べるストラトスに、ゆっくりとマイペースで食べているキーアが消化に悪いよ、と注意するが、年頃の少年がそんなことを聞くはずがなく夢中で食べ続けている。

そんな二人を見て、もう一ヶ月以上前のことを思い出してしまう、カーティアだった。

以前も、いまと同じように食べるストラトスに、そんな彼を注意するキーアがいた。そして自分もいまと同じように、兄弟のように仲が良い二人を微笑ましく見ていたものだ。

そして、現在はいない、シェイナリウスは夕食時には必ず酒を飲み、妹のレインが飲み過ぎだと怒る。

そんな様子を未来路はいつも楽しむように見ていた。

「そういえば……」

カーティアは思い出す。

未来路はいつも食事の光景を笑みを浮かべて見ていた。騒ぐストラトスとシェイナリウスを、注意するキーアとレイン。そしてそんな四人を微笑ましく眺めている自分と……アンナ・サンディアルを。彼はいつも優しそうに、それでいてどこか切なそうに自分たちを見ていたのだと感じていた。

しかし、それも結局わからないままか……。

それが寂しかった。悔しかった。

「ごちそうさまでしたっ！」

ストラトスの声に、カーティアは考えるのをやめる。

「もういいのか……と聞くまでもないか」

鍋はすっかり空だ。成長期であるストラトスのことを考えて多めに作ったのだが、まさか本当にきれいに完食してしまうとは。あまり食べないカーティアにすれば凄い食欲だと思う。

まあだが、そのくらいの方が作りがいがあるというものだろう。

「私、もう眠いかも……」

腹が膨れたせいか、まだ疲労も残っているせいも重なってか、ウトウトと船をこぎ始めるキーア。

「おいおい、食ってすぐ寝ると太るぞ？」

「乙女にそういうことを言わないで。それに、私は痩せているから少しくらい太ったほうがいいかも」

キーアの言葉に、ストラトスはそんなことないけどなあと呟くが、キーアはすでに半分寝ていた。

「ストラトス、毛布を掛けてやってくれ。夜になると一段と冷えるからな」

「はい」

ストラトスは先ほどまでキアが使っていた毛布を彼女に掛ける。毛布が手に届く範囲にあったのは幸いだった。

既にキアは横にはならず、ストラトスに寄りかかるようにして寝息を立てる。できれば余計な動きをして彼女を起こしたくなかったのだ。

パチパチと音を立てる火を囲み、カーティアとストラトスは互いに無言である。

ストラトスはカーティアに聞きたいことがあった。カーティアもストラトスに聞きたいことがあった。

だが、二人ともそれをどう互いに聞いていいのか、タイミングを伺っているのだ。

そして

「あの、カーティア様……ずっと聞きたかったんですけど、俺たちは いや、兄貴はどうして「魔王」と戦うことになったんですか？ 異世界から勇者として召喚されたってのは知ってますけど、理由がわからないっすよ。俺はずっと、兄貴についていこうって決めてたから、助けてもらったあの時にそう決めたら兄貴の後ろを追いかけてましたけど、今は疑問ばかりが残ります」

そして、考えないで兄責任せにしていた悔しさも、とストラトスは唇をかみ締める。

「そうだな。私は最初から共に旅をしていたが、やはり「魔王」を倒すというのは人間と異種族の問題のせいでもあるな」

「問題、ですか？」

「うん。理由は多々あるが、私が知っているのは 異種族からの報復を恐れているからこそ、帝国を魔王を倒したかったのだ」

「報復か……やっぱり、異種族は人間が嫌いなんですかね？」

さあな、とカーティアは苦笑いをする。
そればかりはわからない。

帝国で人間が暮らしていることは知っている。だからといってその人間が何かをされたという話は聞いたことがない。だが、内心ではどう思っているのだろうか？

「嫌い、嫌いではない、それ以前の問題かもしれないな。もともと異種族の多くは大陸中に暮らしていたんだ。それを時代と共に、人間が追いやり、迫害し、時には奴隷のごとく扱い、そんなことを繰り返していた。特に南大陸が一番酷かったと聞いている」

カーティアの説明に、ストラトスは嫌そうな顔をする。

まだ十台半ばの少年に、こんな話はしたくはないと思うが、これからのことを考えるとそうはいかないとカーティアは続ける。

「南大陸はサンラ信仰が強く、過激な者も多いからな。サンラ信仰の本場といえる聖アドリア皇国などは昔から現在に至るまで、人間第一主義であり異種族は家畜のようなものだ。この国の影響力や軍事力は強く、異種族は西へと追いやられていった。そして、聖アドリア皇国の影響を受けて、連合諸国も異種族との溝を深めていく」
「嫌な話っすね」

「まっただ。そして、時代は流れ、人間に容姿の近いエルフはまだしも、他の種族は酷ければ魔物扱いされ殺され、よくて住処を奪われ、北部へと逃げる。これで恨まれていない方がおかしい。異種族は確かに力を持つが温厚な種族が多い、だが決して臆病ではない。ゆえに戦争になれば人間など簡単に殺される。それは知っているだろっ？」

「はい」

嫌というくらい知っている。

エルフの魔術、弓の技術は人間を凌駕している。精霊族は存在自体が高位魔術を超えている。まとめて獣人とするが、彼等は獣の特性を持ち、人にはない能力を有する。鬼族は人間などとは比べ物にならない膂力を持つ。

人間が勝てるとすれば、数だけだろうとストラトスは思った。

「だから人間は恐れているのさ。自分たちで迫害し、嫌悪しながら、いつか復讐されるのではないかと。それゆえに魔王を倒そうと、連合諸国は動いていたのだ」

「なるほど、それで……」

最初は数人だった未来路たちの旅が、最後には連合軍と共にという形になったことを思いだす。

つまり彼等もまた、「勇者」を利用したのだ。保身のために。

「私の許せないことは一つ。復讐を恐れるために相手を倒そうとするのは勝手だ。好きにしろと、冷たいかもしれないがそう思う。だが、その今までのツケを異邦人であるミクロに払わせようとしたことだ」

もつとも、私も同罪だが、とカーティアは自嘲する。

カーティア自身、魔王を倒せば平和になると思っていた。少なくとも今よりは。

だが、旅をして知った。異種族のせいだとされていたことが魔物であったり、時には人間であったり、見たく無いものも見た。

しかし、それゆえに未来路の言っていた異種族との友好関係は必要なのではと思うようにもなった。

「アルテ信仰の教会に身を寄せて私は知った。魔王を殺しても、帝国が崩壊しても、結局のところ……最終的には異種族の報復に遭う

のさ、人間は」

「カーティア様……」

「今頃、ミクロも魔王を倒すことが無意味だと確信しているだろう。きつと倒すべきなのは私たち人間なのだ」

それだけのことをしてきたのだから、とカーティアは言う。

「だけど、兄貴なら人間と異種族が手を取り合っていけるきつかけを作ってくれるんじゃないかって思います」

それはきつと希望だと思うけど、兄貴にとっては押し付けてしまいう形になってしまうと思うけど、一年前のあの日に自分を救ってくれたように、このくだらなくてどうにかなっている世の中にきつかけをくれるかもしれないとストラトスは思う。

だからこそ、今度は兄貴の力になりたいと心から思う。
そうじゃなければ、弟分だなんて恥ずかしくて名乗れない。

「そうか、そうだな……お前は強いな、ストラトス」

カーティアは眩しそうにストラトスを見た。

自分は悪い方向に物事を考える癖がたまにある。それがまた出ていた。

未来路が生きていると信じて帝国へ向かっているのに、悪い方向に物事を考えてどうする。

自身にそう叱咤して、カーティアは思う。次こそは、次こそ必ず最後まで未来路と共にいようと。

「……私は、ストラトスに聞いておきたいことがあった」

「なんででしょうか？」

「今更なことだが、ずっと聞きたくて聞けなかった。良い機会だから

ら聞いておきたい」

「はい」

「どうして、聖女が嘘を付いていると、勇者を殺したのは聖女だと誰にも言わなかった？ 聖女が裏切ったことを考えれば王家はもちろん貴族も同様の考えかもしれないが、民はどうだっただろうか？」

それは……と、言い辛そうにするものの、ストラトスは覚悟を決めるように言う。

「俺たちが遅かったんです。俺たちは、あの人が兄貴を裏切ったことで、誰を信じていいのか分かりませんでした。そんな状態で、連合軍に保護……違うな、半分拘束みたいな形で連れて帰らされて、その後も兄貴が死んだって一度は思った俺たちは茫然自失でした。その間に、どこから流れたのかあの人の良いように話はみんなに伝わって、俺みたいなガキの話は誰も聞いてくれない、シェイナリウス様もエルフゆえに相手にされない、そんな状況だったんです」

それに、と続ける。

「これはシェイナリウス様に聞いたんですけど、確かにエルフとサンディアル王国は友好関係を結んでいました。だけど、それは同盟じゃないし、国にとっては良い話でも国民に対してはどうでも良い話だったみたいです。でも確かに、俺はサンディアル王国の民ですけど、エルフの友好の話を知っていても、シェイナリウス様とレインさん以外のエルフはみたことありませんでした。つまり、みんなにとって聖女であり英雄であり、王族であるアンナ・サンディアルの言葉は自然と受け入れられてたんです」

悔しそうに、辛そうにストラトスは言う。

「俺だつて、知った顔に声を掛けました。兄貴は殺されたつて。でも誰も信じない。なら、どうしよう……っでずっと考えて考えて、ふと思つたんです。兄貴が死んだのを確認してないつて。そうしたら希望が少しだけ沸いてきました。生きているんじゃないかっと思えて、無謀だつて分かつていたけど、探しに行こうつて思つたんです」

「そうか……」

「結局俺は元は農民です。そんな俺が英雄だ、なんて言われても誰も信じないでしょうし、結局のところあの女だけが英雄だつたつてことなんでしょうね」

「そうかもしれないな……」

カーティア自身、ストラトスを責めようとは微塵にも思っていない。

自分は死んだと思つて、祈りをささげていたのだ。生きていると願つてではなく、もう諦めていたのだから。

それに比べれば、ストラトスとキーアは立派だと心から思う。

「……誰か来た」

そんな時、ぱちりとキーアが目を覚ます。

同時に、ストラトスもカーティアも気付く。

「数人に囲まれているな……いくら話をしていたからといって、ここまで接近を許すとは」

「魔物じゃないつてことつすね」

カーティアとストラトスは互いに剣を抜く。

そしてついにこの時が来たかと思つた。

囲んでいるのは異種族だ。北部に入つて魔物と戦つたが、異種族

とは出会っていなかった。それが不幸なのか、幸いなのかはわからない。

だが、ここで異種族と出会ったのなら……

帝国は遠くない。

ならばここでは決して死ねない。

「気を引き締めろ、二人とも」

カーティアの言葉に、二人は頷く。

互いに背を合わせ、剣を、杖を構える。

すると、一つの足音がゆっくりとだが確実に近づいてきた。カーティアの正面だ。

そして、その足音の主は三人の知っている顔であった。

「久しぶりだな、ストラトス、キア、そしてカーティア・ドレスデン」

火の明かりに照らされ姿を現したのは、かつての仲間 シェイナリウス・ウォーカーであった。

遅れましたがようやくの更新です。まだ本調子ではないので時間がかかってしまいました。

というわけで、ストラトスたち三人はかつての仲間と再会します。

次回は未来路をメインに話が進みます。

ご意見、ご感想、ご評価を頂けると本当に嬉しいです。どうぞよろしくお願いします！

8 「元勇者、ドワーフ族と修繕作業」(前書き)

総合評価17000PT、お気に入り件数6200件を超えました。
本当にどうもありがとうございます！ 嬉しいです！
読んでくださっている皆様に、心から感謝しています！

「ミクロ様、今日はお暇ですか？」

朝食後、メイドであるクラリッサが入れてくれた紅茶を飲んでいると尋ねられた。

「いや、とりあえずリオーネが用意してくれた本を読もうかと思っただけど……何か用事でも？」

良く考えれば、魔王リオーネの親族である彼女もまた人間の血を継いでいるのだろうか。そんなことを考えながら、未来路は返事をする。

「はい。ドワーフの頭領殿が魔王城まで来て欲しいと言っていますので」

「魔王城まで？」

はい、と頷くクラリッサ。

「断る理由はないけど……どうして俺がドワーフの頭領に、しかも魔王城に呼ばれるんだ？」

ドワーフといえば、小柄だがたくましい体格をしていて、鍛冶をはじめとした物を造るということに長けている種族である。

同時に、そのたくましい体格であるからこそ、人間の倍以上の力

を持っている。武器を持たせれば頼もしい戦士でもある。

だが、彼等は戦士というよりも、職人という言葉が似合う種族である。

「え、えつとですね……その、なんと言いましょうか」

クラリツサは何か言い辛いのか、言葉を選んでいる。

それに対して未来路は首を傾げる。

ドワーフの頭領には先日会っている。黒狼との意思疎通を可能にする道具を作ってもらったのだ。しかも、ありがたいことにリオーネやクラリツサ、そして未来路が知り合った子供たちの分までも。

そのことに凄く感謝した未来路はドワーフの頭領に、それこそ土下座しそうな勢いで礼を言った。

頭領は人間である未来路に対してぶっきらぼうな態度であったが、礼を言われた時に照れているのがバレバレであった。

そんな頭領が自分に何のようだろう、と未来路は思う。それもクラリツサが言いづらそうにするほどの用事とは？

「ミクロ様が壊した、魔王城の修繕を手伝いに来るようにと……」
「……はい？」

思わず、えー、と首を傾げてしまう。

どうして自分が？ と、思うと同時に壊した自覚はあるので文句が言えないのも事実。

しかし、敵である自分に魔王城という魔王の住まいを修繕させるのはどうなのか？

「あ、リオーネ様は魔王城に住んでいるわけではないですよ。住まいはここです」

クラリツサに聞いてみると、そんな答えが返ってきた。

「……ここ、魔王の家なのかよ」

今更だが、そんなことは知らなかった。てつきりリオーネは魔王城に住んでいるものとはかり思っていた。

「だけど、あれ？ それなら魔王城は？」

クラリツサは未来路が疑問符を浮かべているのに気付いたのか、尋ねる前に教えてくれた。

「実は、魔王城は重要文化財なのです。ですが、ミクロ様たちとの戦いを想定して、迎え撃つたのは魔王城です。いくら住まいがここだといつても、ここで迎え撃てば大変なことになりますからね。それに比べれば、魔王城はリオーネ様が本気を出してもそう簡単に全壊することがないほど強固に造られています。だからこそ、リオーネ様は魔王としてミクロ様を魔王城にて迎えたのです」

苦笑しながら教えてくれるクラリツサに、なるほどと納得した。

確かに、ここが住まい　　というのは正直微妙な感じだが、町の中で戦えば怪我人はもちろん、死者も出るだろう。

もつとも未来路がこのイスルギに来た時には避難はとっくに終わっていて、兵士しかいなかったが、どこへ避難しているのか把握できているわけがない。今思えば、導かれるように魔王城にて魔王と相対したのだ。

「しょうがねえか、俺が壊したんだし。でも、俺が魔王城に入って平気なの？」

「それは大丈夫です。言い方は悪いですが、ミクロ様は害がないという判断をリオーネ様がされていますので。あと、申し訳ありませんが、監視として黒騎士殿を同行させていただきます」

「……しかたないよな、了解。じゃあ、さっそく行ってくるよ」

部屋に戻って着替えるか、と「ごちそうさま」と言って席を立つと、クラリツサに呼び止められる。

「うん？」

「こちらを着ていってください。汚れても良いようにと、頭領殿から預かっています」

差し出された服を受け取り、広げてみると……ツナギだった。しかも、微妙に袖や裾が短い。

「あの、サイズが小さくないですか？」

「ドワーフ族は小柄なので……すみません」

「いや、謝ってもらいたいわけじゃなくて、これを着ると？」

「はい、頭領殿から来るなら必ず着てくるようにと言われていました」

はあ、と溜息を吐いて諦めた。

そして数分後……

「なんか、街にいたよな……こんな格好でチャラチャラしている奴」

それが第一の感想だった。

長身とまではいかないが、一八〇センチに近い身長未来路にとって、ドワーフ族のツナギは袖も裾も七部丈だった。

微妙に悔しいのが動きやすいということだった。

「黒騎士さんは？ 現地集合？」

「いえ、黒騎士殿はお待ちですよ。すでにお外でお待ちです」

「早いなっ……じゃあ、待たせるのも悪いしいって来るよ」
「はい、あとこれはお弁当とタオルです。ではいつてらっしゃいませ」

大きな包みを受け取ると、想像通りの重さだった。

何人前だ？ そんなことを思いながら、未来路は「ありがとう」と礼を言つて、リオーネ宅を出て行った。

「行ったか？」

「ええ、正直行くことを拒否されるかと思いましたが、あまり抵抗なく受け入れてくださったのでホッとしています。それに、最近は元気になってきたようでー安心ですね」

未来路が出て行ったと同時に現れたリオーネに驚くことなく、クラリッサは返事をする。

だが

「そうかな？ 私にはただの空元気に見えるけど？」

心配そうな顔をしてリオーネは未来路の出た行ったドアを見つめている。

「精神的に立ち直っているわけではないんだろうけど、周りから同情の目で見られるのは嫌なんだろうね。そして、平気なふりをしていないと、無理にでも笑って前に進もうとしないといけないうってわかっているんだよ」

それが良いのか悪いのかは後になってみないとわからないけれども、と彼女は言う。

そしてクラリッサは気付く、リオーネが不安を隠しきれない表情

をしていること」。

「そつえば、報告は聞いた。ミクロの仲間が集まったみたいだね」
話題を変えるようにリオーネがクラリッサに問う。

「はい。エルフ族のシェイナリウス・ウォーカー、レイン・ウォーカー姉妹にストラトス・アディール、キア・スリーズ、カーティア・ドレスデンの五名です」

「カーティア・ドレスデンは見えてはいないけれど、確か黒騎士と相打ったという騎士だったね」

「はい、かなりの使い手です」

「そして、シェイナリウス・ウォーカーか……こちらはクラリッサが相手をしたんだっけね」

リオーネの言葉に、クラリッサは肩を落として返事をする。

「申し訳ありません。まさかあそこまで強いとは……」

「別に負けたことをどうこう言っているわけじゃないよ」

苦笑するリオーネだが、本人は悔しいのだろう、クラリッサは「二度目はありません」と意気込んでいる。

だが、二度目があったては困る。それが魔王であるリオーネの考えだ。

すでに彼女は帝国の民として迎えたのだ。そんな彼女とクラリッサを戦わせるわけには魔王として、個人としても良いとは思わない。

「正直なところを言うと、私はシェイナリウス・ウォーカーを相手にすると思っていたよ。だけど、彼女はミクロの願いによって私と戦わずにクラリッサと戦った」

リオーネとしてみれば、シェイナリウスに魔術で勝てるとは思っていない。シェイナリウス・ウォーカーという存在は魔王である自分から見ても規格外だと思う。

だが、総合的な面で見れば勝てるだろう。

必ずと言えないが……総合的に勝っていても、それを補うほどの魔術の才能と経験を持っているのがシェイナリウス・ウォーカーである。

「彼女はあくまでもミクロのことを思って行動を共にしたのだと私は彼女から直接聞いた。異種族と人間の戦いなどよりも、異邦人であり、人間として面白いミクロが気になってしょうがなかったという感じだね。可愛い弟から目を離せない姉と言えればわかりやすいかな？」

「はあ……そんな理由で今回の戦いに参加したのは、シェイナリウス・ウォーカーの噂通りですね」

そう、実は魔王リオーネ・シユメールはシェイナリウスを始めとする、サンディアル王国と友好関係を結んでいたエルフ族と既に会っていた。

そして、未来路の生存も伝えてある。

だが 面会は拒否した。

「今頃、ストラトス・アディール他二名も喜んで良いのか、怒って良いのか複雑でしょうね……」

やや同情するようにクラリッサが呟く。

リオーネはシェイナリウスたち同様に、ストラトスたちにも面会はさせるつもりはない。そのことを伝えるようにと指示はもう既に

出している。

「どうしてミクロ様と仲間を会わせてさしあげないのですか？ 少なくとも、彼等ならミクロ様のためにもなると思いますが……」

「うん、そうだね。きっとミクロを癒してくれると思う」

「……」

「これは私のわがままなんだ。仲間の支えで立ち直るのも良いと思うけど、それだと仲間に依存してしまう可能性だってある。それは駄目だ。そして、私はミクロに色々な種族と人と出会って少しずつでいいから傷を癒してほしいと思っているんだ。それがミクロのためかと聞かれれば、正直わからない。もしかしたら、仲間との再会が一番良いのかもしれない」

「……」

「リオーネは唇をかみ締める。決して口にはしない。いや、できない。」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「こんのお、下手くそがつ！」

まるで砲撃音のような大声が未来路に向かって放たれた。

「っー……この野郎、馬鹿みたいな大声出しやがつて」

「聞こえてるぞ、小僧！ ったく、すこしばかりワシらよりも手足が長くてスリムだからって調子にのるんじゃないやねえ！」

「それって、関係なくないっ？」

魔王城の修繕に借り出された未来路は、帝国に住まうドワーフ族の元締めである頭領こと、ギンガムル・オックスノックスの監督の下で怒鳴られながら働いていた。

ギンガムルはドワーフ族であるゆえに小柄だが、引き締まった体つきに、茶色い髪を短めにしていて、人間で言えば四〇近い年齢に感じるが、美丈夫と言ってもなんら問題のない容姿をしている。

彼もまた作業用のツナギと革靴、皮手袋を装備して、崩れた壁に粘土を塗り、整えられた石を積んでいく。

経験故だろう、作業は素早く、それでいて正確で丁寧だ。

「くそつ、俺だっけしっかりやってるだろう……なあ、黒騎士さん？」

「……一生懸命やっていることは認めるが、私から見ても微妙だと思っぞ」

「……」

「お前の国ではこういった仕事はないのか？」

「いや、ないわけじゃないけど、専門の人以外はあまり縁はないよ。こっちではそうでもないみたいだけだ」

「そうだな、お前の国がどのような国か知らないが、少なくとも帝国では子供も手伝える者は手伝うこともある。城壁の修繕や、種族によって家も違うからこそお互いに手伝えることは自然と手伝わっているんだ」

そうしている内に、自然と子供の時から覚えていくものだと言った黒騎士は言う。

とはいえ、未来路にとって、まったく経験のないことをいきなりやれというのはなかなか難しい話であった。

それに比べて黒騎士は、鎧兜に身を包み、籠手までしているというに未来路よりも仕事はできている。ある意味、器用過ぎるのかもしれない。

「まったく、小僧！ お前さんは材料を運べ！」

「あいよっ！」

こうなりればヤケクソだと言わんばかりに、ギンガムルに負けないう大きな声で返事をすると言われたとおりに粘土の入った袋や石を運び続ける。

もちろん、魔力による身体能力向上は忘れない。

そして、あつという間に時間は過ぎていった。

「づがれだ……」

ドワーフ族に混じって昼休憩を取っている未来路であるが、疲労困憊で地面に大の字になって寝転がっていた。

いくら魔力によって身体能力が上がっても疲れるものは疲れる。

知っていたことだが、こう改めて知らされるとは思わなかったと心

底思う。

このまま寝ていたい、せつかくクラリツサが持たせてくれた弁当を食べないわけにはいかないと、フラフラと包みを開ける。

「……わかっていたけど、中身多過ぎです」

何人前だよ、と突っ込みを入れる気力もわからない。

こちらの世界に米があつて、おにぎりもあることも知ってはいたが、二十個は多過ぎだろう？

それに比例しておかずも多いことなんの……。

きつと一人前ではなく、他の人と食べるという意味なんだろうけど……。

「皆さん、お弁当持ってきてますよ……しかも、もつと大きいお弁当箱で……」

未来路は知らないが、ドワーフは良く食べる。

良く食べて、良く働き、それゆえに強靱な肉体を持つのだ。

「そついえば、黒騎士さんは？」

きつと黒騎士の分も含まれているだろうと思つて声を掛けようとしたが、近くに黒騎士はいなかった。

どこに行つたんだ？

そつ思つた時、声を掛けられた。

「おう、小僧。材料運びご苦労だったな。修繕は下手くそだが、材料運びは文句なしだ。なんだ、魔力による身体能力の向上だっけか？ なかなか便利じゃねえか」

そう言っ て美丈夫な容姿がもつ たいないほど豪快に笑うギンガム
ル。
何か言い返そうかと思っ たが、体力の無駄遣いはしたくなかつ た
のでやめた。

すると、ギンガムルは驚くようなことを言っ つ。

「つたく、そんな少ねえ弁当だから体力持たねえんだよ」
「……………」

そして、さらに驚くことは続 く。

「何だ、食わないのか？ じゃあ、少しもらっ ていいか？ 最近、
ワシの嫁は握り飯を三十個しか作っ てくれん……正直足りんのだ」
「ど、どうぞ……………」
「おお、悪いな！」

と、嬉しそうにおにぎりとおかずを頼張るギンガムルに、帝国の
食糧について不安になっ てしまっ う未来路だっ た。

ギンガムルは地面に腰を下ろしてペロリと三個のおにぎりを食べ
てしまっ うと、未だ疲労に負けて食べようとしていない未来路に呆れ
たように声を掛ける。

「早くお前さんも食べ、せっ かくクラリッサの嬢ちゃんがこしらえ
てくれた弁当だろ？」

「よく……………わかつ たっ すね？」

いままでとは違っ た意味で驚いた未来路に、ギンガムルは笑みを
浮かべて答える。

「ワシは結構長く生きとるからの。それこそ、魔王の嬢ちゃんが小

さい頃に遊んでやったこともあるぞ?」

異種族が長生きだとは知っていたけど……一体、いくつだアンタらは?

さすがにリオネやクラリッサには女性なので年齢を聞くのはどうかと思っただが、この男になら聞いても良いかなと思えてしまう。

「クラリッサの嬢ちゃんは魔王の嬢ちゃんよりも年上でな。良く遊び相手になっっていたワシや他の奴らに握り飯を持ってきてくれたんだ、忘れられん思い出の味ってやつか?」

懐かしそうな笑みを浮かべてギンガムルは笑う。
そんなドワーフ族の頭領が未来路は少しだけ羨ましかった。

「さてと、昼休憩が終わったらワシについて来い。渡したい物がある」

「渡したい物?」

「ああ、まあ、それは後でのお楽しみだな。とりあえず今は、ほれ。さっさと食って体力回復!」

そう簡単にしねーよ、と突っ込みたかったけれどドワーフ族は食べばいいのかと思っただのでやめた。

というか、大量に食べているのに、ただ腹を満たしているだけだったら微妙だと思っただから、その辺りに突っ込みを入れたくなかったのが正直なところだった。

よろよると地面に座りなおすと、未来路もおにぎりを食べ始める。ここ何日か、毎日朝昼晩と食事を世話してもらっているが、このお弁当も美味しかった。

「美味しいな」

「だろう、昔っから嬢ちゃんは料理が美味かったんだよ」

そしてほとんどギンガムルが弁当を食べる形となって昼休憩は終わった。

ギンガムルは仲間に仕事の指示をてきぱきと出すと、未来路について来いと言う。

行き先は、と尋ねると。

「工房だ」

彼は子供みたいな笑みを浮かべてみせた。

遅くなりましたが最新話お届けします。実は、利き手をドアに挟んでしまい、途中から左手だけでキーボードと戦いました……(汗)感想のお返事も遅れてしまったこと、申し訳ありません。

今回はドワーフ族の登場です。

次回は未来路の続きと、ストラトスたちの話になります。

ご意見、ご感想、ご評価を頂けると本当に嬉しいです。どうぞよろしく願います！

9 「魔王、勇者の仲間の前に現れる」(前書き)

総合評価が19000ptを超えました。驚きと同時に、本当に嬉しい限りです！

読んでくださる皆様、本当にどうもありがとうございます！

ウキウキと笑みを浮かべるドワーフ族の頭領、ギンガムル・オツクスノックスに連れられて来たのは、魔王城の敷地にある工房だった。

もっと工房と言っても、レンガ造りである一般的な建物だ。だが、その中は工房の名に相応しい道具の種類で溢れかえっている。

「すごいな……」

未来路にとって素直な感想だった。

今まで武器、防具屋はもちろん、工房にも立ち寄ったことはあるが、それはあくまでも「人間」の職人による「人間」のためのものだった。だが、この工房は違う。「人間」だけではなく「異種族」も使うことを前提にして作られている。

いや、違うか。逆だ。

未来路は思い直す。

「異種族」だけではなく、「人間」も使うことを前提にして作られているのだ。

「そうだろう、魔王城はそれぞれの種族の長が集まるような大きな会議か、敵を迎え撃つくらいにしか使われないが、この工房だけは別だ。我らドワーフ族だけではなく、様々な種族の中から選ばれた者のみがここで働くことができる。職人にとって、この工房はとても神聖な領域だ」

ドワーフ族は自身の工房を持つ。腕によって、立場によって、大なり小なりと差はあるのは仕方がない。それが職人というものだ。

腕が良ければ、自然と工房も大きくなっていく。

だが、職人はなにもドワーフ族だけではないのだ。

例えば、炎の精霊族が発する炎によって鍛えられた剣は、まるで意思を持っているのではと思わせる炎を宿していると聞く。

例えば、エルフが魔術を込めた防具は、対攻撃魔術の防具としてドワーフ族よりも勝ると聞く。

例えば、異種族よりも秀でていない人間が考える武器、防具、道具は面白みがあり、柔軟性があり、便利であると聞く。

このように、様々な種族が互いの長所を生かしながら物を作ることができるとは、工房なのだ。

もっとも、最近では種族同士が手を取り合い様々な物を作るのは珍しくはない。だが、始まりはこの工房なのだ。それゆえに、職人にとっては神聖であり、「始まりの工房」とまで呼ばれているのだ。

「それで、だ」

「うん？」

「さっきも言ったが、お前さんに渡したいものがある」

工房の一室で、ギンガムルと未来路は二人向かい合う形になる。

そして、ギンガムルは一つの棚から布をかぶせたものをそつと大事に手に取ると、二人から一番近いテーブルの上に置いた。

「コトン、と軽い音が響く。」

「今更だが、ワシもこの工房で働く　いや、もつたいぶる言い方はしない方がいいな、ワシはこの工房を任されている。だからこそ、頭領と呼ばれているんだが……」

少し照れたように笑う、ギンガムル。

未来路はなるほど、思う。ギンガムルの頭領という呼び名は、ドワーフ族の長だけではなく、「始まりの工房」の責任者も兼ねてい

るのだと。ゆえに頭領。

「お前さんが、武器よりも素手が得意と聞いてな、だからワシ工房の力を結集させて作り上げたのがこれだ」

ギンガムルはそう言って、布を剥がす。

そして、あらわになったのは 籠手であった。作りはともシンプルな黒い籠手だった。装飾などはなく、その代わりに黒曜石を思わせるほどの美しさを持つ籠手であった。

「……凄く、綺麗だ」

未来路は、その籠手に思わず見入ってしまった。

黒曜石を思わせる一方で、その深い黒ゆえに、どこか夜の海すらも連想させる美しさ。

武器に美しさなど、と無粋なことは言えない。これほどの物をどう言葉にしていいのかわからなかった。

そして何よりも、強い魔力を感じる。ゆえに、海を連想したのだ。海のように深く、大きい、穏やかであり、だが時として大きく荒れもする広大な海。

未来路にとって魔力は海のように感じるが多かった。まるで波打つように、魔力が伝わり魔術となる。

そんな感想を持っているからだろう、この黒く美しい籠手が夜の海を連想させるのは。

「お前さんが剣が苦手だっというのは、魔王の嬢ちゃんから聞いてあった。こういうことを言ったらスマンと思うが、お前さんが「元勇者」であって「聖女」に裏切られたことも知ってる」

「だったら、どうして……」

そんな独白を聞いて、未来路は戸惑った。

何も言わないのだ？ 文句の一つでも言うべきではないのか？

「俺は敵だったんだぞ？」

「そんなことは知ってる」

「俺は異種族を数多く倒した、数は少ないけれど殺しもしたし、怪我させた数なら数え切れない」

「それだって知ってる」

「俺は、リオ―ネを……アンタたちの魔王を倒そうとしたんだぞ！」

恨めよ、怨めよ！

俺はアンタたちのもっとも障害たる「勇者」だ！

未来路は叫ぶ。

「だが、お前さんは魔王の嬢ちゃんを殺すつもりはなかっただろう？ それどころか、聖女の魔術から嬢ちゃんを守ったって聞いたぞ。だから感謝している」

「それは、結果論だっ！」

「それにお前さんは嬢ちゃんを倒すつもりだったかもしれないが、殺すつもりはなかっただろう。異種族と人間の友好関係を結べればと思っていたんだろう？」

「そうじゃない、そうじゃない！俺が言いたいのはそのじゃない、アンタは、いやアンタたちはどうして俺をそう簡単に受け入れられる？ どうして俺に優しくする？ もっと恨めよ、もっと憎めよ、もっともっと責めろよ！」

「……」

「何黙ってたんだよ！ なんだよ、あれか？俺が裏切られた間抜けだからって哀れんでるのか、そうだろう？ そうじゃなかったら、俺に武器なんて渡すわけねえからな……それで今度はアンタらが俺を裏切ってお終いか！」

苦痛だ、苦痛なんだよ。

ずっと、ずっと、誰も彼も俺に優しくして。俺は敵だったのに、アンタたち異種族と何も知らずに、ただ戦ってただけの相手だぞ。なのに、どうして優しくするんだよ！ どうして、どうして、どうして！

「ふう、言いたいことはそれだけか？」

未来路の叫びに、ギンガムルはため息を吐く。

そして、

「歯あ、食いしばれ！」

ドゴンッ！ と、鍛え抜かれたドワーフ族の渾身の拳で未来路の頬を殴り飛ばした。

魔力による強化などしていなかった未来路は、大きく後ろに吹っ飛ばされて壁に当たって床に落ちた。

数メートルは飛んだだろう。

そして、一瞬だけが、未来路の意識は飛んだ。

「小僧、お前さんは腹の中でそんなことを考えてたのか……」

気持ちは理解できる、とは言わない。だが、分からなくもない、とギンガムルは言う。

「良いか、ワシら帝国の民は「元勇者」ミクロ・サクラマチを受け入れはした。同情もした、哀れみもした。そして、憎みもしたし、恨みもした。それに何より、許していない」

許していない。

そう言われたかったのに、床に倒れる未来路はその言葉に怯えるようにビクリと震える。

「確かに敵だった。なら敵をいつまでも恨んでいれば、憎んでいればいいのか？ それは間違いだ、小僧。人間の国じゃ、いつまでも恨み、憎むかもしれんが、ここは、帝国では負の連鎖は断ち切るという意思を民が持っている」

「……負の連鎖を断ち切る」

蹲っている未来路が、小さな声で繰り返す。

「そつだ。憎んで、恨んで、復讐して、そして相手が同じ事をしてそれを繰り返す。馬鹿げているとは思わないか？」

「……それじゃあ、やられてもやり返すことができないじゃねえか」

「そつ極端な意味ではない。敵対すれば戦う、戦うなら容赦はしない、だが今のお前さんはどうだ？ 戦う意思など持っておらんではないか？」

「……」

「もしもだ、お前さんがまだワシら異種族を倒したいと戦意を持っているなら、受け入れることはできない、それ相応に対応する。だが、違うだろう。お前さんは最初からワシら異種族と本気で戦いたかったか？」

んなわけねーだろう！

これ以上もないくらいに未来路は叫んだ。

「誰が好き好んで戦つかよ！ 喧嘩なら別だ、喧嘩なら何度だってやってやる。だけど殺したり、殺されたり、そんなやり取りは嫌に

決まってるだろう！ 人間、異種族、なんだよそれ？ そんなくだらねー理由で戦ってんじゃねえよ、馬鹿じゃねえのお前ら！」

「……確かに」

ギンガムルは苦笑いをして頷く。

「だいたい、こっちの世界の人間は頭がおかしいんだよ！ 何が勇者だ、何が聖女だ、結局殺し合いの駒じゃねえか！ 初代魔王だって、俺と同じ騙された間抜けだ！ その子孫のリオーネも馬鹿だ、大馬鹿だ、俺を助けやがって、俺に優しくしやがって、いつそ殺してくれば全部楽になれたのに、アンタたちを傷つけた罪の意識を感じなくて良かったのに！」

俺は、何も知らないまま死にたかった！

結局のところ、それが偽らざる桜町未来路の本音だった。

立ち直ってなどいない。いつまでも、ウジウジとグズグズと引きずって引きずって、近所の子供たちと触れ合うたびに笑顔の下で泣いて、リオーネたちが優しくするたびに心から血が流れていた。だけど、それが罰だと思っていた。それが、辛くて仕方がなくとも。

「それが本音か、吐き出してすつきりしただろう？」

知らない内に、涙で顔をグシャグシャにした未来路が顔を上げると、暖かい笑みを浮かべたギンガムルがいた。

そしてその手には黒い籠手を。

「先ほど、ワシは許しておらんと言った。だが、許さないと云ってはいない。お前さんは、償うべきだ。自分自身の為に。ワシらが心

からお前さんを許していると言っても、絶対に納得しないだろう。それはお前さん自身が自分のことを絶対に許していないからだ」

「……」
「だから、ワシらはこの籠手を作った。お前さんが自分を許せるように、自分の意思で守りたいものを守るように、な」

そうすれば、きっと自分自身のことを許せる時が来る。

ギンガムルは優しい声で、諭すように未来路に言う。

「受け取れ、ミクロ。これはお前さんの物だ。別にこれで帝国のために戦えなんて言うつもりは一切ない。自由にしろ」

差し出された籠手を、未来路は恐る恐ると手を伸ばし、そして掴んだ。

「これでお前さんは一歩前進した。良いじゃないか、傷つきながらも、泣きながらも、失敗したって何度でもやり直せ、生きているんだからそうやって一歩ずつ前に進めれば後で後ろを振り返った時は大体笑えるもんだ」

どこか、地球にいる父を思い出させるような笑みを浮かべたギンガムルに、未来路は「ありがとう」と涙でグシャグシャになった顔で言ったのだった。

ストラトス・アディーアはこれでもかというくらいに、不満であった。

今すぐ暴れだして慕う兄貴の下へと行きたいのだが、如何せん周囲を囲んでいるのがエルフたちであり自分よりも実力者であるゆえにそれができない。

同時に、我慢しているのは自分だけではないということが、ストラトスの理性を繋ぎ止めていた。

事の発端は、シェイナリウス・ウォーカーとの再会だった。周囲を囲まれるという物騒なものであったが、再会は再会だ。

シェイナリウスは長く美しい銀髪を伸ばし、ストラトスが初めて見るエルフ族の民族衣装を身に纏っていた。

サンディアル王国内で立場が危うくなっていたエルフたちがどうしているのか心配だったストラトスだが、大陸北部で再会できるような気がしていた。そして再会できた。

一度は囲まれたりしたものの、魔王が敗れたという連合諸国の発表のせいか人間がパーティーを組んで北部へやって来るのだという。つまり、ストラトスたちはそんな輩と間違えられたのだ。

もつとも、ストラトスたちと確認されるとすぐに警戒は解かれたが。

それ以上に、シェイナリウスから聞かされた、桜町未来路の生存を聞き、ストラトスはもちろん、キア・スリーズ、カーティア・ドレスデンは涙を流して喜んだ。

生きている、と信じていてもどこか不安だったのだ。それが解消された。

だが、決して会ってはいけないと魔王直々に言われていると聞かされ、会いにいけないことに憤りを感じていた。

数日我慢した。だが、その我慢にも限界があるのだ。

「何が、兄貴が自分で一步を踏み出すまで我慢しろだっ！ 兄貴が一步前に進めないなら俺たちが支えてやるよ！ いったって兄貴は

俺たちにそうしてくれたように、今度は俺たちが……そうだろう！」

炎のような髪を振り乱しストラトスは大声で同意を求める。

「それはもちろんだ。しかし、な……」

「うん、だけど……」

だが、ストラトスと違い、金色の髪を顎の辺りで揃えた修道服に不釣り合いな剣を持つカーティア・ドレスデンと、灰色の髪にローブを纏ったキーア・スリーズは言いよどむ。

「な、なんだよ……どうして、そんな反応をするんだよ？」

きつと自分と一緒にだと思っていたのに、自分とは違う、躊躇うような反応をされてしまい、ストラトスは訳が分からないと混乱しかける。

「俺、間違ってるか？ 兄貴の下へ行きたいって思って帝国まで来たのに、兄貴が前に進めないなら力になりたいって思ってるのは間違ってるのか？」

「いや、そんなことはない」

答えたのはシェイナリウスだった。

ストラトスの気持ちは間違っではない。いや、そもそも気持ちに間違いも正解もないのだ。そしてなによりも、シェイナリウス自身も、もちろんこの場にはいない妹であるレイン・ウォーカーも何度未来路と会いたいと思ったことか。

カーティアとキーアも思いは同じだろう。

「私たちも会いたいと思っている。魔王が命じなければ私は会いに

とつくに行っていた。私はあの馬鹿弟子の師だ。弟子を支えるのが師だ。だが、同時にエルフ族の一つの部族の長の娘として軽率な行動はできないのだ」

それに、アイツが私たちに会いたいと思っているかどうか分からない。

その言葉はストラトス・アディールの心に深く突き刺さった。

「なんすか、それ？　なんだよ、それはッ！」

思わずシェイナリウスの胸倉を掴もうとして、カーティアに羽交い絞めにされて止められる。

「やめるんだ、ストラトス！」

「放せ！」

だが、そう言われて今のストラトスを放すほどカーティアは馬鹿ではない。

「違うだろ！　そうじゃないだろう！　兄貴が俺たちに会いたくない？　違うだろう、俺たちはそんなことで躊躇する程度の覚悟で帝国に来たのか？　アンタたちは、兄貴のことを思って言ってるんじゃない、自分たちが傷つきたくないからそう言って誤魔化してるだけだ！」

ストラトスの言葉に、シェイナリウス、カーティア、キアが反応する。

「兄貴にあんなことが遭ったのに何もできなかったのは俺たちだ。」

兄貴がもしも俺たちに会いたくないとか、恨んでいるとか思っているのも俺たちのせいだ！ だったら、だったらそれでも兄貴に会って力になれなくてゴメンって謝って、恨んでも良いから、憎んでも良いから、裏切っただけはいないって言いたくないのかよ！ 俺たちはあの女とは違っって信じてほしくないのかよ！」

ストラトスは分かっている。所詮、この気持ちも自分本位の感情だ。きつと、兄貴のことを考えていないだろう。だけど、それでもだけど、会いに行きたいのだ。

「君の気持ちはわからないではないけれど、私はそれを許すことができない」

ストラトスの叫びの言葉に、シェイナリウスでもない、カーティアでもない、キーアでもない声が返事をする。

「誰だっ！」

声の方向はストラトスの真正面だった。だが、そこに人影すらない。

しかし、次の瞬間、声と共に魔法陣が展開されて、一人の女性が現れる。

「確かに君たちであれば、ミクロを支えることはできるだろう。ミクロが一步進むきっかけになってくれるかもしれない。だが、私はミクロに君たちに頼らないで立ち上がって欲しいと思っている」

現れたのは、透き通るような白い肌を持ち、その肌に映える艶やかな黒髪を伸ばした女性だった。

もちろん、ストラトスやカーティア、キーアには彼女が誰なのか

がわからない。

だが、シェイナリウスだけは違った。

「魔王、リオーネ・シュメール……」

どうして、貴方がここに？

そう聞かすにはいらなかった。

同時にシェイナリウスが呟いた魔王という言葉に、彼女が帝国の王である魔王なのだと思ふ三人はようやく気付く。

「うん、君の質問に答えるけれど、君たちが合流して私に連絡が来たのは先程だった。だから、挨拶を兼ねてミクロのことについて色々話と相談をしておこうと思ってるね」

魔王リオーネは淡々と言う。

そして、ストラトスと目を合わせると軽く会釈をする。

「こうしてお目に掛かるのは初めてだね、ストラトス・アディール」
「あ、あんたが魔王なのか……？」
「そう、私が魔王リオーネ・シュメールだ。女でびっくりしたかな？」

少しだけ微笑んでみせるが、ストラトスにとっては逆効果であった。

「違う！ 魔王が女だとか男だとかどうでもいい、どうして俺たちを兄貴に会わせてくれないんだ！ お前は何を企んでいるんだ！」
「企む？ 私は何も企んでいない。もちろん、ミクロと共に今後を歩んでいきたいと願ってはいるが、今はただ少しでも彼に安らぎを思っている」

「ふざけるな、俺が聞いてるのはそんなことじゃない、どうして俺たちを兄貴に会わせないんだって聞いてるんだよっ！」

ストラトスの言葉に、リオーネは笑みを消した。

表情が一瞬にして抜け落ちたことに、それと同時に感じる敵意にストラトスはもちろん、カーティアとキアもゴクリと喉を鳴らす。

「どうして君たちをミクロに会わせない？ そんなことを言われなければ君は気付けないのか？」

「だ、だから、なんだって言うんだ！」

意地で意地だけでストラトスは吼えた。

だが、魔王からの返事は冷たいものだった。

「彼は重荷を背負っている。そして今、彼の翼は折れている。その折れた翼に君たちはまだ重荷を背負わせたいのかい？」

淡々と冷えた声で、魔王はそう言った。

最新話をお届けします。

相変わらず未来路がウジウジとしていますが、もうしばしお付き合いください。

もう少しで立ち上がります。そして物語りも進んでいきます。

ストラトスたちの前には魔王が登場です。

次回は今回の続き……その前に未来路の過去話を入れてみようかな
と思っています。

もしかすると、前後しそうですが……。

ご意見、ご感想、ご評価をいただけると大変嬉しいです！
どうぞ
よろしくお願いします！

10 「勇者召喚」(前書き)

お気に入り登録件数7200件を超えました。本当に感謝で一杯です！

読んでくださる皆様、本当にどうもありがとうございます！

いけねえ……歳を取ると、つい説教を始めちまう。

ギンガムル・オックスノックスは籠手を抱きしめるように抱えて泣く未来路を見て、頬をかく。

どうも死んじゃった馬鹿息子を思い出しちまうせいかな……つい手が出ちまった。

そんなことを思った。

ギンガムルは今でこそドワーフ族の頭領であるが、当然ながらに若い時代もあり、その時代には前魔王の元で人間と戦争をしていた。そして、ギンガムル自身も戦場で斧を振り回し、多くの人間を殺した経験を持っている。

だが、その戦争で息子を亡くした。

辛かった、悲しかった、そして何よりも同じ戦場にながら息子を守ることができなかつたという親の苦悩はきつと同じ経験をした者でなければわからないだろう。

同時に、同じ経験はして欲しくないと思う。

時は流れ、戦争はあるものの、人間の国々も代替わりや様々な事情から回数も少なくなつた。

戦争などなくなつてしまえ、どうして何度も血を流せるのだろうか？

何度も、何度も、疑問に思った。

もっとも、人間は八十年生きれば長生きだが、異種族は基本的に人間の三倍以上は生きる。精霊などになればそれこそ寿命などあつてないものである。

だからかもしれない。人間もきつと親しい者が死ねば悲しむだろう。だが、短い生ゆえに次の代にそれが生かされていないのではと

思う。もちろん、両親を亡くす者、兄弟を亡くすものもいるだろう。それが後悔ではなく、憎しみに繋がったら？

戦争は続く。

戦争を経験したことがないゆえに、悲しい思いをしたことがないからやめようとは思わないのだ。

もちろん、全員がそう思っているわけではないことは分かっている。戦争を回避したいと願っている者がいることも知っている。だが、現実として戦争は終わらない。

そして決着も着かない。

人間と異種族が争って良いことなどない、近年増加する魔物が既に第三の敵として人間にも異種族にも牙を向いているというのに。

このまま破滅に向かうのか？ ゆっくりと時間を掛けて。

それを回避しようとしているのが、現魔王であるリオネ・シユメールであった。

初代魔王を知る数少ない者は彼女を見て、今までの魔王の中で最も初代に似ていると言う。

何が、という説明は聞いたことはない。だが、そう言うのだ。

そして、そんな現魔王が選んだ男　それが「裏切られた勇者」であった。

どうしてリオネが未来路を選んだのかはわからない。だが、初代魔王のように「勇者」として召喚され、「裏切られた」。これほどの皮肉はないだろう、とギンガムルは思う。

年寄り……と言うつもりはまだないが、長く生きている者の経験として、これから何かが起こる　そう思った。

だからだろうか……以前、未来路に黒狼と意思疎通を可能とする「黒狼の鈴鳴り」を渡した際、歳相応な笑顔な……だけどどこか悲しさを感じさせる笑みを見て、少しだけ息子と笑った顔が重なった。

戦争なんてなくなるといいね、そんなことを言いながら戦場に出て、敵を倒すためではなく、仲間を守る為に戦った自慢の息子。若くして戦場で息絶えた息子。

人間を憎んだ、恨んだ、呪いもした。だが、息子が死ぬ前に残した「いつかきつとみんな仲良くできる世界が見たかった」という言葉を思い出せば、人間を許してきた。

他の種族もそうだ。人間に住処を奪われ、親しい者を殺されて、帝国へ逃げてきたのだ。皆、人間に対して良い感情を持っていない。だが、それでも人間によって人間扱いされない人間を帝国は保護する。仲間と認め、助けある。時には人間と恋に落ちて結ばれる者もいる。

だからこそ異種族たちは知っているのだ。

人間だろうと、異種族だろうと、結局のところは心が大事だと。

綺麗事かもしれない。だが、それでも良いと思う。綺麗事も言えなくなったら、こんな世界はお終いだ。

だから期待しているのだ。

魔王リオーネ・シユメールと元勇者桜町未来路がどう進んでいくのか、を。

彼は重荷を背負っている。そして今、彼の翼は折れている。

その折れた翼に君たちはまだ重荷を背負わせたいのかい？

ストラトスは、目の前の女性が……いや、魔王が何を言っているのか分からなかった。いや、分かりたくなかった。

助けになりたいと思っっているのに、今度こそと思っっているのに、

「どうして、そんなことを言うんだ!」

怒りに任せてストラトスは叫んだ。

だが、魔王　リオネ・シユメールは何も言わずにただストラトスを見下ろすようにしているだけ。

「なんとか言えよっ!」

それでも魔王は答えない。

それが苛立たしくて、どこか馬鹿にされているような気がして、自分の思いを否定された気がして、ストラトス・アディールは敵意を浮かべた。

しかし、その瞬間だった。

「ッ……」

いつから居たのか、どこに居たのか、ストラトスにはまったくわからなかった。

亜麻色の髪を持つメイドが、戦斧の切っ先をストラトスの喉にピタリと当てていたのだ。

「ストラトスッ!」

その光景にキーア・スリーズが悲鳴を上げる。

彼女もまたメイドの存在に気付かなかったのだ。

その一方で、メイドの存在に気が付いていたシェイナリウスとカーティアがそれぞれ構えようとして、

「クラリツサ、下がってくれ」
「はい」

最初に魔王が動いた。

「君たち二人もだ。ミクロの仲間と無駄な争いはしたくない」

彼女の言葉にシェイナリウスとカーティアが警戒を緩める。

ふう、と嘆息した後にはリオーネが話し始める。

「ストラトス・アデール」

「何だ……」

「君になんて言葉を掛けるべきか迷っていた。結果的に怒らしてしまつたなら謝罪しよう。そして、改めて言おう、君に……いや、君たちにミクロとまだ会って欲しくはない」

「何故だ！」

「君はどこまでもミクロを慕っているんだね、でもだからこそだよ。わからないかな……例え、君たちによって立ち直つたとしても、それで良いのかい？」

魔王の問いに、ストラトスは即座に答える。

「当たり前だろう！」

「本当に？」

至極当たり前前に答えたストラトスに、魔王は冷めた視線を送って尋ねる。

その冷めた視線に半歩退いてしまつたストラトスだが、それでも吼える。

「そうだ、当たり前だ。俺は兄貴に救われた、親に捨てられて生きるか死ぬかのところを救ってもらったんだ。あんなに暖かくて優しくて強い人が苦しんでるなら、助けになりたいって思うだろう。例え、助けにならなくても傍にいてやりたいって思うだろう?」

息を切らしてストラトスは叫ぶ。

「そんな理由じゃ駄目か? あの女から兄貴を守れなかった、いや……その後もまったく何もできなかった俺じゃあ近くに居ることも駄目だって言うのか!」

「いや、そんなことを言うつもりはないよ……正直、君の言葉を聞いて一つの懸念が晴れた」

それは未来路の仲間が裏切る可能性ということだ。だが、それも杞憂だったとリオネは思う。

ここまで真っ直ぐに未来路を想っているのなら、裏切ることはないだろう。

だが その真っ直ぐな想い故に未来路と会わせたくはないと思うのだ。

「私が君たちをミクロと会わせたくない一番の理由、それは……ミクロが君たちに依存してしまうことを恐れている。同時に、君たちが未来路に依存してしまうことも恐れている」

「……なッ」

そんなことを突然に言われ、激昂しかけるストラトスだが、リオネは構わずに続ける。

「彼が今、傷ついているのは分かっている。苦しんでいるのも分かっている、悲しんで、どうしようもないくらいに絶望していること

も知っている。だが、だからこそ自らの足でゆっくりで良い、どのくらい時間が掛かっても良いから、少しずつ立ち上がって歩き出して欲しいんだ」

だからこそ、

「君たちが今ここでミクロと再会してしまうことで、君たちに頼るなら良い、だけど 依存してしまったら、次に何か会った時には決して立ち上がれない」
「……」

助け合うのは良いことだと思う。それが仲間であるなら、なお更だ。

だけど、

私はまだ、ミクロから仲間に出たいと聞いたことはない。

いや、それどころか仲間の話すらしていない。

当初、目を覚ました時に触れる程度で話をしたが、それ以来仲間の話を聞いたことがなかった。

彼が会いたくないのか、それとも裏切られたと思っているのか、それは分からない。会いたいと思っているが、もしかしたら……と
思っているかもしれない。

だが、それは当たり前だ。

信頼していた者に裏切られる、それは経験したことがなければわからない。とはいえ、誰でも経験するかもしれない。気付かない内に、知らない間に、些細なこととして。

だが未来路は違う。

大きな裏切りを受けた。いや、最初から裏切られていたのだ。

今、彼が何を思っているのかわからない。決してわ

からないだろう。

だからこそ、仲間と会わせることができない。仲間と会うことで立ち直れるかもしれない、だが依存する危険がある。

正直に言ってしまうえば、依存するならばいい、それで立ち直ることができるなら。きつとストラトスたちは裏切らない。だから、依存でも良いと思う。

しかし、それはあくまでもプラス思考としてだ。

もしも未来路が仲間に出会いたくなかったら？ 仲間と会うことで逆に心が駄目になってしまったら？

未来路だけではない、仲間たちもきつと大きく傷ついてしまうのは目に見えている。

だから私はミクロと仲間を合わせたくない。

色々な理由を並べたところで、結局のところ桜町未来路自身がまずは自身で立ち上がり、仲間と向き合える準備をしなければいけないのだ。

リオネ・シユメールは未来路のためだけではない、未来路の仲間たちのためにも、彼等を再会させたくないのだ。

だが、それも所詮はリオネの我侷であり、自己満足にしか過ぎない。

リオネには進むべき道がある。それに未来路が共に歩んでくれれば嬉しいと思っっている。そして、彼の仲間も同様だ。

もう既に世界は「人間」と「異種族」が争っていられるほど時間がないのだから。

サンディアル王国内にある、太陽の女神サンラを祭る神殿の最上階。

太陽の女神であるサンラに加護を受けられるように、最上階の天井はガラスになっている。耐久性に不安を覚えるものも多いが、強化魔法によって保護されているガラスは最上級攻撃魔術すら防ぐという噂である。

そんな最上階、太陽の光が降り注ぐ中、一人の少年が呆然とその場に立ち尽くしていた。

「ここは、どこ?」

少年が辺りを見回すと、観賞用と思われる植物が多く育てられていて、日の光を浴びて豊かに輝いている。

上を見上げると、ガラスの天井と雲一つない青空が広がっている。そして、足元に視線を移すと……まるで少年には理解ができない文字で書かれた陣があった。

「魔法陣?」

呟いてから少年は笑う。まさか、そんな馬鹿な、と。

自分はさっきまで自宅にいたはずだ、だけどどうしてこんな場所にいる?

疑問は尽きない。

そんな時だった。

「お待ちしておりました、「勇者」さま」

とても優しげな声だった。

「誰っ？」

声の主を探して、戸惑いながら周囲を見回すと 亜麻色の髪の少女が優しい笑みを浮かべて立っていた。

思わず息を呑んでしまう。

可憐な少女だった。少女のように小柄なだけだろうか？

純白のドレスに身を包み、聖女のように笑みを浮かべる少女から目を離せなかった。

「……勇者？」

ずっと彼女を見続けていたかったが、聞き逃せない言葉を言ったことを思い出して正気に戻る。そして、聞き返した。

彼女は可憐な笑みを浮かべて、

「はい、貴方は勇者としてこちらの世界へ招かれました」

「こちらの世界って？」

「はい、この世界は貴方の世界とは別の世界となります」

そんなことを突然言われて受け入れられる訳がなく、さらに混乱するばかり。

戸惑い、混乱し、思わずその場に座り込んでしまう少年に、彼女は駆け寄ってそっと体を支えた。

甘い香りがする。

「どうか落ち着いてください、貴方は選ばれたのです。今、この世界は大きな危機に見舞われています。私たち「人間」だけではもう対処ができませんのです」

「……どうして？」

「どうしてでしょうか……私にも分からないことは多く、戸惑っているばかりです。こちらの身勝手な都合で本当に申し訳ありませんが、もう貴方に頼るしかないのです」

甘い香りに包まれながら、少年は彼女の言葉を聞き続ける。

「どうか私たちを助けてください」勇者「さま……」

彼女の頬を涙が伝う。

泣いているのだ。

少年の心が痛む。

「勝手な理由だと理解しています。貴方はこれから辛い思いをするでしょう、ですが私は貴方に助けを求めるしかないので……私を助けてくださいますか？」

「……うん、僕にできることなら」

少年は思う。彼女を泣かしてはいけないと。

どうして自分が勇者なのかわからない。わかるわけがない。

だけど、きっと僕は彼女を守る為に選ばれたのだろう、と思った。

この可憐で、どこか儂げな彼女を。

「君の名前は？」

名前が聞きたかった。

「私の名前は、アンナ・サンディアル。サンディアル王国の第二王女です。貴方のお名前を教えてくださいましてよろしいですか？」

アンナ・サンディアルは、可憐な笑みを浮かべて 嗤った。

10 「勇者召喚」(後書き)

若干短いですが、更新させていただきました。
未来路の過去話予定でしたが、一話ずらさせていただきました。

話を進めることをメインにやっていたましたが、そろそろ主人公視点で物語を進めたいと思っています。

同時に、それぞれの登場人物の心情なども少しずつ明かしていきたいと思っています。

そして、今回はタイトル通りに「勇者召喚」です。

後の展開を楽しみにしてくださいと嬉しいです。

ご意見、ご感想、ご評価をいただけると、とても嬉しいです。どうぞよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0622x/>

裏切られた勇者のその後.....

2011年11月1日01時11分発行